

ガーデンと空の海、風の国と 子

作・渡辺えり

登場人物

水の人 A

B

C

D

E

F

原始人の主婦

田中（田中まさ子・タナカマサコ・か

の子）

佐藤（佐藤晃）

鈴木（鈴木誠）

少女（井森一海・七海）

田中かず夫（タナカカズオ）

その子（南風の子・ソノオ）

井森光子（麗子・レイコ）

佐藤弓子

鈴木沙織

直子

井森徹夫（テツオ）

井森良夫（ヨシオ）

男（のぼる）

別の男

違う男

また別の男

丁稚達

泉男爵（北風の子）

誰かが庭に水をまいた。

魚の背のように光るじょうろの、ハスの実のような出口からほとばしる水、水、水。その水はいつしか切れ目のない糸となり、糸の先のしずくが柔らかなガラス細工のようにふくらんで行く。

誰かの手が水の糸をたぐる。

たぐり寄せ、放しては下に、上に、誰かの指先がその糸を操り出す。

ふくらんだガラス細工はある形をなし、操られて動き始めた。動き始めたのは、ようやく人の形をなしたかと思える白色の水の人々。

A 何をしている？

B 練ってる。

C 何を？

B 小麦粉さ。お前は？

A 練ってる。

C 何を？

A 小麦粉さ。お前は？

C 小麦粉さ。

D うどんを作るんだね。

A C B F A D E D F E D C B A F D F E

ラーメンだろ？

小麦粉だぞ。

冷や麦か。

そうめんだろ。

とにかく練ってる。

練ることがだいじ。

細い糸を作る。

丈夫な糸を。

細い糸を。

見えないくらい細い糸。

うまいだろうな。

お前、食べるのか？

食べないのか？

食べてどうする操り糸を。

食べるのは人形かあ。

操られる人形が操り糸を食べ、

操られた先を栄養にして太る。

早く人形持ってこい。やせっぱちの人形達を。

六人、小麦粉を器用に練っては伸ばし、伸ばしては広げ、また伸ばし、細い糸を作り出して行く。

嫌だなあ。

え？

食べられるの判ってて操るの。

俺達が？

食べられるの？

だってそうだろ？この糸は俺達の指じゃないか。

俺達、小麦粉だった？

そんなようなもんだろ？

いいから早く人形達を。話が始まらないじゃないか。

何の話？

何か・・・物語。

俺達は物語を語るために練ってるんだから。

俺達はカマキリのオス。

ええ？俺達カマキリだったの？

たとえだよたとえ、物語の子供を生む人形に食われる、語る父が俺達。

カタルチチ？

ああ、精神の浄化かあ。

F E C D C B A F A D E D F E D F D

F E D B D F 喋 C B E A E F A C

そりゃカタルシスだろ。

どちらも悲劇によって完結する運命。

語る父でカタルシス？

誰が泣いてスツキリするのよ。

まだ見ぬお客さ。

ストーリーテラーが最初っから死んじやっても始まる話かい？

喋るのさ、肥え太った人形どもが、

俺達の記憶を食べた人形が、物語を演じ、俺達の操り糸を飲みながら、操られた口で

る。

俺達は消えるだけか、糸になって。

糸になって。

見えないくらい細い糸。

何だ見えないのか、なら食われても同じだ。

見えない糸を食う。

何て強欲な人形だ。

水の人達の練った小麦粉がモチのように弾力を増し、水の人、語りながら伸ばしたモチの一方を放り投げ伸ばし、伸ばした一方をまた放り投げ伸ばし、繰り返し

ているうちに、いよいよ、徐々に細い麵状のものが出来上がって行く。

A さあ食らえ、人形どもよ。

一同 さあ食らえ！

と、一同一斉に天井より麵を振り降ろす。

する。

そしてそれは細胞分裂を繰り返しながら、床をはいずり、空を飛び、訳の判らない

も

のに形を変え、定まらない生命を確かなものにするためか、動きに一定のリズム

が加

えられる。それはまるで悲痛なほどこっけいな群舞にも似ている。

水の人に操られ進化したこの人形の一部分が人の形に変化して行く。それは三人の

原始

人、仮に、田中、鈴木、佐藤さんちの奥様であった。

田中 やだあ、

鈴木 アラアラ、

佐藤 なんと、

一同

あたしたち進化しましたあ！

と、三人舞台前方に飛び出してくる。

鈴木

しちゃったわよホント。

佐藤

信じらんない。

田中

ほんの三分よ。（ストップウォッチを取り出して）

鈴木

こんな進化ってある？

佐藤

あるのよ。

田中

カップヌードルの三分にだってお湯が必要なのよ。

鈴木

お湯のいらない三分なんて、便利なのか、ズサンなのか、お手軽すぎる進化には何

か

口に出してはいけないような裏がある。

佐藤

何それ。

鈴木

役者は奴隷だあ！とか、骨折しながら一ヶ月も稽古したのにあっという間じやな

いか

よう！とか今時の若いものあたし達に集団で同じことやらそうとしたって無理

じ

やん！とかさ、

と、徐々に小声になっていく。

田中 あたし達にお湯がいらぬのはあたし達が乾燥してないからじゃないの？

佐藤 あら、ぬれてる？あたし達、

鈴木 うううん、もう乾いてる、あつという間に海からあがったもの。

田中・佐藤 進化よねえ。

鈴木 ちよつと待って、あたし達原始人でしょ？

田中・佐藤 うん。

鈴木 こんなベラベラベラ喋る原始人なんて、原始人？

二人 ……。

鈴木 これって原始をバカにしてない？

一同 ……。

田中 原始人に原始をバカにできる余裕なんてないわよ。原始人が今が原始だなんて自

覚し

ながらウツホツウツホツやってるかな。

私達、今をウツホツホツホ生きているだけでしょように。

二人 ウツホツウツホツ！……………そうか、

一同 ハハハハハハ

鈴木　でもなんで日本語喋ってるの？

田中　日本の原始人だからでしょ。

佐藤　えええ！ここってアフリカのサバンナじゃなかったの？

一同　・・・

鈴木　何ゆうてはりまんねん。あたし達原始人やんけ。なんでもこれから始まるんや。0
か

ら1の間やで、好きにしたらええんや。なんでもありやんけ。

佐藤　だったらここが東京でも山形でも、ルーマニアでもチベットでもあたし達が決
てい

い訳ね。

鈴木　そうや！地球を丸ごと関西にしたる！

田中　やめて！あたしコスモポリタンでいたい。あたし、戦争やいじめ、不倫も援助交
際

もない清らかな地球を作って行きたいの。

そうね、それにはこの生まれたての自然を守り抜かなきゃ！狩りなんかやって他の動
物を食べるのはいけないわ。イルカやクジラも勿論ダメ。田んぼだつて作っちゃダメ

よ。森の木を切ることになるから。何も食べちゃダメよあたし達。エアコンもエレベ
ーターも作っちゃダメ！車もダメ！息しちゃダメ！自然が一番、美しい自然のままの

地球を守り抜くのよ！

少年

鈴木　じゃあみんなで自殺しよう。なかったことにしようこの進化。

田中　ああ！（正気に返って）今何喋ってたの私、ああびっくりした！今二十一世紀の少女の作文が取り付いたような。

佐藤　田中さん、わたくし達素朴な原始人なんだから、ボーっとしてちやダメよ。

鈴木　そうね佐藤さん、働きましょう、こんな時代なもの、体力で勝負よ。ボーっとしてたらゴジラに踏み潰されちゃうものね。

と反復横飛び。

佐藤　違うわよ鈴木さん、ボーっとしがちなよあたし達、だってこの脳ミソ、ヒトとサ
ル

い暗　の間を行ったり来たりしている感じでしょ？スキ間があるのよ。なんともしがた

闇が。意識の届かぬ、まるで人ごとみたいなこのスキ間。

一同ボーッと突っ立っている。

鈴木　今何してたあたし達。

佐藤 何にもしてない、このブーツが恐いのよ。

田中 じゃああたし、さっきこのスキ間につけ入られたのね。まだ柔らかい脳ミソに誰かの

考えが分け入ってくるのね。

佐藤 だから危険だって言ってるのよ。わたし達洗脳されやすいタイプなんだってば。

田中 素朴で純真なタイプが狙われるのよね。

鈴木 う まだ何も始める前から縛られちゃあ嫌よね。本能で生きて、学習を繰り返して行く

ちに人格は形成されるべきよ。

田中 本能って、脳に埋め込まれているものなの？それともよそから入ってきたもの？

鈴木 じ あんた、あたし達の本能すら、ボーっとしている間によそから教え込まされたもの

やないかと疑ってるの？

田中 て行 何だか良く判らないのよ。数ある生き物の中でどうしてあたし達だけが人になっ

くのか。

と、三人ブーツと立ちつくす。

い

佐藤 未 ダメダメ、ボーツとしてちや。働いて働いて、死んで行くのよ！そんなナゾナゾは

来の生き物が解いて行くんだから。

働くったって、その辺の小動物絞め殺すだけでしょ？なんだかむなしいわよ。

鈴木 田中 田中さん、ダメよ、生きて行く事まで疑っちゃ。ホラ、あたし達の頭、徐々に霧が晴れて行くようでしょう？スキ間にはいり込んでくる光の嵐。これだって、生きると

うことの知恵にすぎないんだもの。

田中 あさましいわあ。

だから進化したのよあたし達。そのあさましさが進化の元なのよ。

佐藤 わよ、ちよつとゴチャゴチャ言ってる間に日が暮れちゃったじゃない、原始の森は恐い

何が飛び出すか判らないから。

と、少女が一人現れる。

一同 キャーッ！・・・
田中 なんだ、小動物よ。

佐藤さつきから自分のオデコの固さと腹の固さを指で押して確かめている。

鈴木

何してるの？

佐藤
な

私達朝から何も食べてないのよね。おなががね、オデコに比べるとフニヤフニヤに

ってる。

一同

・・・

鈴木

早く絞め殺しましょ。

と三人あさましい顔でおそいかかろうとする。

少女

フン！

一同

・・・

少女

あたしを誰だと思ってるの？

一同

・・・

田中

口を利いたわ。

鈴木

ただの小動物じゃないぞこいつ。

佐藤

誰なんですか？あんた。

少女

道に迷って往生している、いたいけな少女よ。

鈴木 小動物かと思ったら、ハエだったのか。

田中 ハエ？

鈴木 しようじょうバエだろ？

少女！

鈴木 ……伝説の獣。形は人に似て、人語を解し、酒好きの動物。もしくはオランウータンの事である。
田中 なんだサルだったのか。

と三人去りかける。

鈴木 あたし達が去ってどうするのよ。こいつがサルなんだから。

佐藤 早く絞め殺そう。

少女 あたし帰れなくなっちゃった。

鈴木 どっから来たのよ。

少女 え……と。(と方向を示そうとするが判らない)

田中 イライラするなあ、ハッキリ答えなさい！

少女 ……(と涙ぐんでいる)

田中 ちよつちよつと何よ。私がいじめてるみたいじゃないのよ。

鈴木 まあまあ田中さん、(と隅にひっぱって) 最近の子はアレだから、居丈高にどなる

ん 田中 か こ ない 間 め 鈴木 田中 へ？ か

じゃなくて、ホラ、下手に出てほめてあげないと。

なんでよ。あっちが悪いんじゃないの。自分がどこから来たのか判らないなんてお
しいでしょ？どこからこなきやここにはいないんだから。まあ、百歩譲って、ど
から来たのか判らないんだとしてもよ。ハッキリ判らないって答えりやいいじゃ
の。何で黙るのよ。時間の無駄でしょ？何であたし達オバサンが、そんな無駄な時
に付き合わなきゃいけないの。甘えよ甘え。あっちが悪いのよ。なんで悪い奴をほ
なきやなんないのよ！

田中さん、相手は子供なんだから。こっちが大人になって、乗せてやらないと、向こ
うだって心を開かないから。

こんな簡単な質問の答えが、いちいち心を開かないと答えられないっていうの？
1 たす1は何ですか？って聞いたたら、すかさず2ですと答えるか、判りません、と

い
う。

佐藤
田中
か

忘れました、とか、一般的には2だと言われておりますが、私は別の考えを持っています。その考えがまとまるまで、今しばらくお待ちくださいとか、色々あるでしょう。それが会話してもんじゃないの？

うん・・・まあねえ・・・

反発してるのよ。あれは。私達オバサンをバカにしてるのよ。モヤモヤってごまして、自分のペースに引き込もうとしてるのよ。・・・あたし、負けないわ。

少女さつきから泣きマネしつつ三人をうかがっていた。

鈴木

ねえ、猩猩さん、よく考えてごらん。ここまでくるのにどれくらい歩いたの？

出掛ける時ね、あのお月様、どっちの方角に出たか覚えてないのかな？

あたしは、庭に水をまいてただけ。水の先を見つめながらボンヤリしてたの。どれ

く

ら이었다ったのか覚えてないけど、気が付いたらこの森にいたのよ。あたしはあたし

の

お庭に水をやらなきゃいけないのに。

鈴木 何を言っているのか、あたし達原始人には理解できないけど、あんたが私達の森の
仲 間であることは確かだと思うよ。だって、私達は一番初めの物言う生き物なんでも
の。
田中 鈴木さんだまされちゃダメよ。あいつよそ者よ。いるのよ、しょつ中どっかに迷い
込
み
り んじゃ、おつきくなったりちっちゃくなったりする奴。しかも、そいつら決まっ
て
鈴木 さんだまされちゃダメよ。あいつよそ者よ。いるのよ、しょつ中どっかに迷い
込
み
り んな若い娘なのよ。それにアリスとかソフィーとか、西洋人だけなんだから迷った
す
るのよ。あいつも外人よきつと。
鈴木 西洋人て方向音痴なの？
田中 しかもおせっかい。苦勞するわよアジアの民は。
佐藤 田中さん、今は原始なんだから、西洋もアジアもないよ。それに向こうはサルです
よ。
少女 ちよつと知恵が足りないだけだと思ふなあ。
動 そう・・・私はボンヤリしながら、ちよつと夢を見ていた。じょうろの先の水の
きに引き込まれ、起きていながら、寝て見た夢の続きを見ていたのかもしれないの

だから私、ちっともアセることないのね。いつかは霧も晴れて、私はただ、庭に水をまいているだけだってことが判るはずだわ。なあんだ、ハハハ、そうなのね。こんなおかしな原始人がいる訳ないもの。

田中 いる訳ないって、あんた見たことあるのか！原始人を。

鈴木 まあまあ、田中さん、たかがサルの独り言なんだから。ほっぼらかして、獲物を探そうよ。

田中 でも、腹が立つのよね、なんだか、自信あり気でしょ？根拠のない自信で恐いわよ。サルの脳ミソってうまいんだってな。

鈴木 佐藤さん、何考えてるの？いくら何でも、物言うサルを……

田中 そう言いながら……鈴木さんの浅ましい目。

鈴木 本能ってすごいわね。

と、三人また少女におそいかかろうとする。

少女 こんな夢見たくなかった。

鈴木 夢ってなに。

少女 眠っていると、見えてくる、現実とは別の世界のことよ。

田中 あたし達進化したばかりだからさ。まだ眠ったことないものねえ、ヒトになってか

佐藤

そうよ、今朝だもんね、ヒトになったの。

鈴木
急

ちよっと待って、じゃあ昨日まで何だったの私達。これちよっと変だわ。起きたら

にヒトになってたなんて。しかもオバサンよ。私達昨日までオバサンのサルだったの？私達がもしサルから生まれたとしたら……

田中
ン

でもサルが突然ヒトの子を生むっていうのも変よ。サルがヒトを育てたら、ターザ

になっちゃうでしょ？

鈴木

進化って一体何？最初に人になった人って誰？

少女
たな

それあたしが小学校の頃に疑問に思ってたことだわ。やっぱり目が覚めるまで待

きやダメね。食べられたって平気。夢なんだから。

田中

何だかさっぱり判らない。もしかするとこのサルがあたし達の母親なの？

少女
そ

ええ、あたしはあなた達の母親的存在と言っても過言ではなくってよ。あなた達は

んなありがたい母親を殺して食べるんだわ。

鈴木

ううん、知恵が欲しい。新しい知恵が。

佐藤
少女

ほんと、またボーっとしてきた。原始人てつらいわね。

だったらもっと進化しなさい。

める)

田中　そうねえ。今度は一分で済むかもしれない（とストップウォッチを持って計り始

何か不気味で大きなトンネル状のものが舞台に現れる。トンネルが動いている間に　三人の原始人、その入り口から一人ずつ入って行く。三人目が入りきるとすぐに田中が出口から現れるが、進化は進み、現代の日本の主婦に変化している。

田中

一分二十三秒。進化したわあ。すごいわねえ。うん、何だか知恵があふれすぎて、知恵の中で泳いでるって感じだよ。ね、鈴木さん、佐藤さん、アレ？（とトンネルの中をのぞく）鈴木さあん！佐藤さあん！やだ、淘汰されちゃったわよ。自然って残

酷

ねえ。

あら、一海ちゃんじゃない。ちようど良かったわ。あんたんち行くところだったのよ。お母さんに買い物頼まれたんだけど、アレ、売り切れだったのよ。広告の、ホラ、ホレ、アノ、こよう四角くて、穴があいてて、いや、穴はあとからあけるんだけど、その穴から一枚ずついや二枚がくっついて一組になってるやつを、こようひっぱってホ

ラ、

それは紙なんだけど、純粹パルプだったり、世田谷なんかでは、近頃再生紙使った

り

してるあれよ、ホラ、鼻かんだりする奴よ。何これ、進化したって全然ハッキリしないじゃないの、この頭。

少女 ティツシュですか？

田中 そう、それ。五個三百八十円の売り切れでさ、五百三十円のでいいかどうか聞いてき

てくれないかな。

少女 いいですそれで。いつもすみません。

田中 いいのよ、こっちは毎日行くんだから。

買い物カゴからメモを取り出して読み上げる。

「絹ごし三丁。ホーレン草一束。紅花油。水色の布きん。長ネギ三本。しょうが一パック。お客様用枕カバー。以上。」一海ちゃんはなんかいるもんじゃないかい？ ついでに買ってきてやるよ。

少女 いえ、いいです。

田中 誰かお客さん？

少女 ええ、ちよっと親戚の子が。

田中 じゃ、行ってくる。・・・あれ、あたしは何を買いに行くんだったかね。メモすり

や良かったよ。一海ちゃん、うちの夕飯何だっけね。

少女 さあ？

田中 この頃ホント物忘れが激して。ちよつとそこで電話してみよ。

と、田中の夫かず夫がその子の手を引き大きなスーパーの袋をさげて通りかか

る。

あれ？あんた。

かず夫 あれ？ お前、なんだよ出掛けなかったのか。

田中 え？

かず夫 お前お通夜の手伝いがあるからって、俺に買い物頼んだじゃないの。ホラ、

と、スーパーの袋を差し出す。

後ろで一海に気が付いたその子驚いたまま硬直している。

田中 やだ、ホント？井森さんちのも買ってきてくれた？

かず夫 ああ。井森さんちの裏口に置いとくように言ってたぞお前。

田中 ああ、思い出した。あそこんち親戚少ないから、大変なのよね奥さん一人で。やだ、早く手伝いに行かなくちゃ。一海ちゃん、そんなとこ突っ立ってないであんたもお母

さん手伝いなさいよ。

かず夫 何言つてんだ？お前。

田中 え？

かず夫 一海ちゃんは手伝えないだろ、一海ちゃんのお通夜なんだから。

田中 忘れてた。一海ちゃん、夕べ亡くなったのよね。あれ？今あたし、確か一海ちゃん
と……

少女は消え、少女がいた辺りに白い花が咲いている。その側にはじょうろが転がっていた。その近くでその子がひきつけを起こしている。田中思索しながらじょうろを拾って花に水をかける。

ま、いいか。

かず夫 何だよ。

田中 何でもない。何やってんのその子は！

その子 ……カ、カ、カ。

田中 バカだね、幽霊見たぐらいで興奮して。

かず夫 見たのか？

田中 まあね。

かず夫 何だよ、おしいことしたなあ。見る奴は見るんだよなあ……くやしいな

あ……

俺だけいつつも貧乏クジ引いて……

田中 今度出たらすぐに教えるから。それ、お願いよ。私も着替えてこなくちや。その子！
その子 ……か、か、か……

田中 何だよ、もらしちやったのかい？しょうがない子だねえ、あんたも早く着替えて、
手

伝うんだよ。

かず夫 ほんとに教えろよ。必ずだぞ。よし！何だか生きる勇気が湧いてきたぞ。

と、三人退場する。

少女がいつの間にか登場していた。

少女 あたしは庭に水をまいていただけ。

もうすぐ目が覚めるはずよ。覚めない夢なんて、夢じゃないもの。

舞台は庭に面した井森家の台所が変わっていた。後ろの窓から白い花がのぞい
てい

る。台所のテーブルには折り詰め寿司や酒類が並んでいる。

看護婦の制服を着た、一海の叔母光子がノートにメモを取りながら、お金の計算を

している。そこに一海の母麗子の級友、弓子と沙織がはいってくる。

弓子 下がらないわ。

沙織 入院しないでいいのかしら。

光子 あ、大丈夫です。姉さん、いつもだから。

弓子 え？

光子 動揺すると必ず熱出すから。

沙織 みっちゃん、今度のは普通の動揺とは違うんじゃない。そりや麗子はよく熱出したわ
よ。運動会や期末試験の前日になると必ず学校休んでたけど。今回のはねえ、ことが

ことだもの、ねえ。

弓子 ほんとにねえ。……私ももう、かける言葉も出なくて……

光子 でも困りますよね。沙織さん達が来て下さって本当に助かりますけど、姉さんには
し

っかりして貰わないと。私だって毎日来られる訳じゃないし。

沙織 こんな時にそんな冷たい事……

光子 冷たくなれたら……私だってもっと幸せな時間が持てたんじゃないかって、そ

う思

ったりしますけどね。いつもこうやって面倒なこと全部引き受けることになるんです。・・・私だって泣きたいです。一海ちゃんのこと大好きだったし。でも誰かが、テキパキ働かないと、進んで行かないでしょう？どんなことがあったって、・・・明日は来るんだから。

と、立ちあがりトイレに行く。

弓子 あたし妹さんと初めて会ったわ。

沙織 あらそう？良く忘れ物とか届けに教室に来てたじゃない。

弓子 そうだった？

沙織 地味でおとなしいって感じの子だったから、気が付かなかったんじゃない。弓子い
つ

も窓の外見てボンヤリしてたから。

弓子 麗子が派手過ぎたのよ。なんでも頼まれると嫌って言えないせっぱつまった迫力があ

ったものね。

沙織 や そ、なんか放つとけないなって気になって、ついつい尽くしちゃうのよね。みっち

んも苦労したのかもねえ・・・

トイレで大声で泣く光子の音がする。近所の犬が鳴く。

弓子 可愛そうに一海ちゃん、まだこれからって時に・・・

と泣く。

沙織 もし、うちの子がと思ったら、なおさらねえ・・・

と、二人光子の泣き声に誘われるようにすすり泣いている。

と裏口からかず夫が現れる。

妙にニヤニヤしている。

かず夫 あの・・・

沙織 はい・・・

かず夫 この度はご愁傷様でした。これ、女房が頼まれた奴。

沙織 そうですか・・・すみません。あの・・・

かず夫 筋向いの田中です。それとこれ、

と、香典袋を出す。

沙織　じゃ、表から回っていただいて、あの御焼香を。

かず夫　あ、後でいいですよ、女房も手伝いに来るし、皆さんの後で……

弓子　でも、まだどなたもいらしてないんですよ。今のうち済ましてらした方が……

かず夫　誰も来てない？

弓子　ええ、今のところは……

かず夫　やっぱり……

弓子　え？

かず夫　いや……じゃ、ちよつとやってきます。

と、裏口から出て行く。

弓子　何か気味の悪い人ね、ニヤニヤしちゃって、

沙織　悪いわよ、元々そういう顔の人かも知れないじゃない。

と、かず夫また入って来る。

かず夫 あ、これ、確かにここに置きましたから奥さんか誰か家の人に渡して下さいよ

沙織 はい、確かに。

かず夫 お宅ら・・・誰？

沙織 あ、失礼しました。麗子さんの高校時代のクラスメートで、

かず夫 奥さんの・・・

沙織 ええ、鈴木です。

弓子 佐藤です。

かず夫 下の方は、

弓子 え？

かず夫 名前よ名前。

沙織 鈴木沙織です。

弓子 佐藤弓子です。

かず夫 俺、かず夫。じゃ。

と、出て行く。

弓子・沙織 ……

光子トイレから出てくる。

沙織 これ、筋向いの田中かず夫って人が、

光子
ああ、助かった。

と、中味を冷蔵庫にしまったりしている。

沙織
みっちゃん、あの田中さんでどういう人？

光子
……

弓子
なんだかねえ……

光子
あそこの娘さんが一海ちゃんと同級生で、親しくして貰ってるんです。何かあったん

ですか？

沙織
いや、別に……

こういう時に頼りになるの御近所では田中さんだけだから。

弓子
そう言えば誰も来てくれないのね御近所の人達。

沙織
弔問客もまだ誰も……

光子
世間なんてそんなもんなんです。お義兄さん、ずいぶん助けてあげたのに……
徹夫さん会長やってるんでしょう？PTAの。

光子
先月やめました。三年前から町内会長も引き受けちゃって、てんでこ舞いだっ

で
す。それも先月降りましたけど。

弓子と沙織顔を見合わせる。
チーンと鐘の音がする。

光子 あら、誰か御焼香・・・
沙織 あ、田中さん、
光子 やだ、誰もいないのよ・・・ちよっとお願いします。

と、出つく。

沙織 事情があるのよ、何か・・・
弓子 知りたいけど聞けるような雰囲気じゃないわね。

鐘の音が連続して聞こえる。

沙織 来たわよ、来たじゃない。
弓子 思い過ぎしだったかしら。

と、バタバタと二人の高校生直子とかの子が入って来る。
(かの子は田中まさ子

の二役である。直子はアゴに大きなバンソーコーをはっている。直子、弓子達がい
たので驚く。

直子 びっくりしたあ……

かの子 今晚は。

弓子・沙織 今晚は。

直子 ちよつとのど乾いちやつて……

と、冷蔵庫のジュースをコップでグビグビやる。

かの子 あたしのは？

直子 自分でやりな。

かの子 うん。

と、ウーロン茶を出してコップに注ぐ。

よ？
あのこれ、勝手にやってるんじゃないやありませんから、ホラ、名前書いてあるでし
いつも一海ちゃんちに集まってたから、私達の買い置きですから。

沙織 一海ちゃんのお友達？

かの子 はい。部活も一緒なんです。

と、ウーロン茶とジュースのペットボトルのフタをきちんとして冷蔵庫にし

まっ。

かの子 あの、誰か来ましたか？私達の学校の・・・

沙織 いえ、まだ・・・

かの子 そうですか・・・

直子 あたしのせいじゃないからね。痛かったんだから、恐かったんだからね。誰だって

大 声出すと思う、誰だって警察呼ぶと思う。突然だもの突然！一瞬なにがなんだか判

ら なかったわよ。顔よ顔！お嫁に行けなくなるかと思っちゃった。辺り一面血の海だ

も の。人殺しい！て叫んでたわよあたし、言うのよねやっぱり。ドラマの時代劇だけ

か と思ったら、言うのよやっぱり。人殺しい！って。そこら中の人が駆けつけてくれ

て、 すぐに取り押さえてくれたけどさ。びっくりしたわあ、良夫兄ちゃんだったんだも

の。

かの子

あんなに騒いだ後で知り合いだなんて言えなかったわよ。
・・・信じられない。

直子

あたしが嘘吐いてるっていうの？

かの子

違うけど・・・

直子

見せようか？これ、

かの子

いいよ。

と、かず夫現れる。

かず夫

おう、どれ。

と、直子のバンソーコーをはがす。

アララララ、

子。

と、顔をふせながら直子にバンソーコーを渡す。恐がって小さくなっているかの

ん、

直子
八針。

かず夫 いやあ……きれいにぬってあるわ。

かの子 え？

かず夫 一週間もすりや消えそうだな。今の医術ってのはすごいねえ、俺なんかこれだも

と、上着をめくって腹の刺し傷を見せる。

かず夫 適当にあっちこっちぬいやがって、一生消えんぞ。

かの子 お父ちゃん！

かず夫 あれ？かの子、母さんまだか？ああ娘なんですよこれ、かの子っていうんです。

こ

つちはそのこのペットショップの娘で直子ちゃん。挨拶したかかの子、

かの子 うん。

沙織 あの、これ……

と、かず夫にお茶を出す。

かず夫 あ、おかまいなく、

と、ニヤニヤ笑っている。

直子 おじちゃんどうしたの？

かず夫 ええ？

直子 笑ってるから。

かず夫 そんな不謹慎な・・・おじちゃん悲しいんだぞ。

と、笑っている。

一同 ……

と、その子入ってくる。エプロンを付けている。

その子 あっ！直子ちゃん！見せて見せて！

と、バンソーコーをはがす。

なあんだ、パツクリって言ったのに。

かの子 その子！

直子 初めはパッキリだったのよ。ぬったんだから。

その子 そんな時見たかった。

かず夫 これ、下の娘でその子。

弓子・沙織 今晚は。

その子二人をジロジロみる。

その子 おばちゃん達、麗子おばちゃんの友達？

二人うなづく

かず夫 弓子ちゃんに沙織ちゃん、可愛がってもらえその子。

その子 うん。

と、沙織のヒザに乗ったりする。

その子 良夫兄ちゃんは？

かず夫 二階だろ？降りてこられないだろ。なあ、

かの子 あたし、帰る、

かず夫 何だ手伝わないのか？
かの子 着替えてまた来るから、

と、出て行く。

直子 ショックなのよ、かのっち、良夫兄ちゃんに勉強見てもらったりして仲良かったし
勿論一海ちゃんのこともあって、ダブルパンチよ。でも一番の被害者ってあたしじ
や

ん！

かず夫 まあな・・・母さん遅いなあ・・・
その子 その子のパンツ洗濯してんの。あ・・・。直子ちゃん、あのさあ！
かず夫 シッ！

何？

直子 直子ちゃん帰った方がいいんじゃないのか？

え？

かず夫 良夫君、針のムシロだろう。

直子 だって一海は親友だもん、一晩一緒にいてあげたいもん。

と、急にこみあげて泣きじゃくる。

その子 泣くことないよ直子ちゃん、また会えるんだから。

かず夫 バカ！

沙織 今何て言ったの？

その子 さっきそこでね、

かず夫その子をなぐる。

泣き出すその子。

と、廊下をはうようにして浴衣を着た麗子が現れる。(光子との二役である)

弓子・沙織 きゃあ！

麗子 オシッコ。

弓子と沙織あわてて麗子を立たせようとするがすぐにくずれ落ちてしまう麗子。

弓子 妹さんにシビン出して貰った方がいいんじゃない。

かず夫 もらしちゃってもいいよ奥さん、まさ子に始末させるから、

麗子 大丈夫です。い、行きますから。

と、トイレのドアの前に倒れ込んでしまう。

かず夫 どれ、

と、麗子を持ちあげてトイレの中に一緒にはいる。

麗子の声 あの、いいです。

かず夫の声 遠慮すんなって、

麗子の声 結構ですから、

かず夫の声 早くしちやいなって、ホラ、こうやって持ちあげてるから、な、

麗子の声 自分で立てますから、

かず夫 そう？

と、かず夫だけ出てくる。

だいぶ弱ってるな奥さん、

沙織 あたし達も泊まって行こうか、

弓子 そうね、夜中になつたら弔問客も増えるだろうし。麗子があれじゃあねえ。

かず夫 うちのが来るから、平気ですよ、

と、田中まさ子現れる。

田中 遅くなっちゃって……

かず夫 おう……

田中 あら……

弓子 佐藤です。

沙織 鈴木です。

田中 田中です、あれ？……

弓子・沙織 なんですか？

田中 いえ、なんか今頭がボーッとしちゃって。

かず夫 奥さんの同級生だって。

田中 じゃあ、弓子さんと沙織さん？

弓子・沙織 はい。

田中 聞いてましたよ奥さんに、詩の朗読会とか一緒にやってた親友だって。

二人顔を見合わせてうつむいたりしている。

その子なんですか、オバサン重いでしょ！ こっち来なさい！ あれ？ かの子

は？

かず夫 会わなかったか？ 家帰ったぞ、着替えて来るって。

田中 奥さんは？

かず夫 トイレ。

田中、トイレをたたく、中から弱々しくノックを返す音。

弓子 熱が下がらなくて、

田中 体弱いからねえ・・・奥さんには昔からお世話になりっぱなしで、代われるものなら

代わってあげたいよ・・・

と、トイレの中を意識して強い口調で泣いてみせる。

旦那さんは？

沙織 まだお帰りじゃなくて、

弓子 こんな時に代わりの方が見つからないなんてねえ。

と、鐘の音。光子が廊下から現れる。

光子
沙織さん、御主人が、お迎えに見えられたけど。
沙織
あらもう？

と、出て行く。

弓子
うちののは？
光子
御主人仕事先に泊まられるそうで、代わりにお義父様が・・・
弓子
やだ、わざわざ良かったのに。

と、出て行く。

光子、テーブルの前に座ってため息をつく。

田中
大変だったわねえ、光子さん、
光子
すみません。いつも姉が御迷惑ばかりおかけして、
田中
あたしなんか何も、買い物頼まれるぐらいで、
光子
あ、ありがとうございます。助かりました。
直子
あたし、もう一度一海に会ってくる、（と立ちあがる）

その子 え？（と瞳を輝かせる）

田中 あら、直子ちゃんいたの！

と、田中が近寄ると直子自分でバンソーコーをはがして傷を見せる。

なあんだ、（と田中興味をなくす）

廊下を出て行く直子。

追いかけるその子。

田中 あんた、もう帰りなさいよ。明日も早いんだから。

かず夫 何で？ もうちよつといるよ俺。

田中 こんなところに男がいたら変に思われちゃうわよ。

かず夫 こっちの隅っこの方で静かにしてるから、な。

と、ニヤニヤしている。

と、麗子の夫、徹夫が裏口からはいってくる。喪服を着込んでいる。

徹夫 ただ今……

光子 お帰りなさい。

徹夫 つ みっちゃんごめんな。葬式二つも重なっちゃって、博君が食当たりで出られなくな
たもんだから、どうしても抜けられなくてね。

田中お茶を注ぎ出す。

あ、いいですよ、田中さん。すぐ向こうに行きますから。

田中 葬儀屋さんも大変ねえ。若い人なかなか育たないんでしょう？
徹夫 常識ない奴多いから。叱るとすぐにやめちゃうし。

と、立ちあがる。

光子 ちよっと休んだ方がいいわ。

徹夫 動いてないよね。……本当は今日も、忙しすぎたんで、助かった。

一同 ……

かず夫 じゃあ徹夫さん、明日の告別式はいつもみたいに自分でバリバリ仕切っちゃっ
たら。 今日も入り口でちようちん持ったりしちやって。

一同
.....

徹夫 麗子はまだ寝てるのか？

光子 ええ。

徹夫 しょうがない奴だなあ、みっちゃんにまかせっぱなしで.....

光子 でも、誰も来なかったから.....。

徹夫 そうか.....

と、廊下に出ようとするのとトイレの中で音がする。

誰かいるのか？

田中 麗子さん。

光子 ええ？

と、トイレのドアを開けると麗子が倒れている。

やだ姉さん、もうしっかりしてよ。

徹夫、麗子を抱えて廊下を出て行く。

光子も後を追おうとする。

徹夫 いいよ、みっちゃんは。俺がやるから。
田中 そうだ御焼香してこなくちや。光子さん、何かあったら呼んで下さいよ。
光子 すみません。

かず夫、田中についていく。

田中 何よあんたは。
かず夫 今日はお前から離れる訳にはいかないんだよ。

と、ニヤニヤしながらついて出て行く。

一人になった光子、さっきの作業の続きを始める。

窓から一海がのぞいているが、光子それには気付かない。

階段を降りる音がする。

麗子と光子の弟の良夫がパジャマ姿で現れる。手にはポテトチップの袋を持っ

りパリやっている。

て
パ

光子 良夫。

良夫 …… なんだろう……

光子 え？

良夫 客観的に見て。

光子 何が？

良夫 姪の焼香もできないってことなんだよね。結果的には。

光子 そうね。

良夫 一海が死んだのも俺のせいかね。

光子 事故よあれは。

良夫 俺のも事故だったんだがなあ。

光子 間が悪かったわよ。そこら中で通り魔事件の模擬行為が頻発してたんだから。あれ

は

全部良夫君だったって噂が流れたって仕方ないもの。

良夫

忘れてたんだよ、右手にブロック持ってたの。スピーカーの下に敷こうと思ってさ

入

公園の花壇から失敬して、自転車乗ったんだ。前のカゴには、ビデオやらCDやら

ろ

れてたから、こう右手に持って、片手運転でき。駅前で、直子が歩いているのに気付いて、後ろからビックリさせようと思って、さっと近寄って、肩をね、よっ！ ってこ

ろ

う右手で軽くたたこうとしたらさ。持ってたんだよなあ…… ブロックを。あやま

光子 うと思ったって、もう大騒ぎで、
仕方ないわよもう。直子ちゃんの傷も良くなったみたいだし。大事に至らなくて
良かったと思わなくちゃ。
良夫 お姉ちゃん、俺どうすればいいのかな。

と、パリパリ。

光子 やめなさい。そんなのばっかり、体に悪いって言うてるでしょ。
良夫 考えてんだよ。・・・こうやって噛み噛みしていると脳細胞が活性化してくんだよ。
光子 何か作ろうか？ おなかすいてんでしょ。
良夫 それでいいよ。(と寿司の折り詰めをさす)
光子 ダメよこれはお客用なんだから。
良夫 来たのかよ！ 誰か客が来たかよ！

と、突然怒り出す。

光子 やめなさい興奮するの、あんたすぐカツとなるから。だから疑われるのよ。当分お
と なしくしてなさい。

良夫 家 に出
撮 ン
御 ず
光子

じゃあ誰がビラ配ったんだよ。誰が町内会の掲示板に貼ったんだよ。あの写真は、にしかない写真だろ？ 誰が家から持ち出したのよ！ 俺が高校ん時、修学旅行かける直前、玄関の前で撮った写真だよ、姉ちゃん達にはさまれて、両手でVサインしてる奴。ごていねいに門に貼ってある番地まで写ってる奴だよ。徹夫義兄さんがったんだよね確か、写ってないから。

「連続通り魔事件の犯人はあなたの町内に潜んでいます。御町内の皆様は御用心、御用心。Y君は現在二十五歳、二十代の殺人者特有の平板で無表情な顔。職にもつか町内をブラブラしており、深夜近くのビデオショップに出没。御用心、御用心。」良く書くよ。・・・徹夫義兄さん、撮る時合図しないから。急に撮るからさ、今、笑うぞって構えてたのにさ。

初めっから笑ってれば良かったのよ、Vサインはしてただから。

良夫、無表情にVサインしてみる。光子、思わず笑ってしまう。

良夫
光子
良夫
の写

．．．．
もう、あんたのせいで、こんな時に笑っちゃうじゃないよ！
くそう．．．あれは選んだんだよ、数ある写真の中からいかにもあぶなそうな顔
真を。誰なんだよ一体。

と、かず夫が廊下を来る。

かず夫 よお！
良夫 あっ！

と、二階に行こうとする。ポテトチップがそこらに散らばる。

かず夫 いいよいいよ良夫君、ちよつと便所借りるだけだし。

良夫去りかけようとしたまま後ろ向きにストップモーションのように硬直して

いる。

かず夫 何だよ、あんなことぐらいで。気にすんなって。俺なんか、これだぞ。

と、服をめくってまた腹の刺し傷を見せる。

三人殺っちゃったよ、三人。ま、正当防衛だったからすぐに出てこれたけどさ。良夫君もしろうとさんに手え出したのはちよつとまずかったよね。徹夫さんも言

る
つて
たけど、近頃の若い衆は常識がないからなあ、平気でくろうと巻き込んで、逃げのばかりすばしっこくてさ。

と、トイレに入る。

「お邪魔しましたあ」と声がして奥から沙織と夫の誠、弓子と義父の晃がやってくる。田中がそれらを追い抜いてバタバタと入ってきてテーブル上の寿司の

折

り詰めと小さな酒のビンを白い袋に詰め始める。

良夫、逃げ出したくとも逃げられない状態に追いやられている。

光子
お帰りですか？

沙織
ええ、泊まって行きたかったんですけど、主人がかえってお邪魔だろうからって。

田中 あちらにお酒も用意してたんですけどねえ。
誠 すみません、車で来たもんですから。
晃 うちもこれから山梨に帰るんで。
田中 ほんとに皆さん遠い所からわざわざいらしていただきまして、ありがとうございます
まし

た。これ、どうぞ。

と、紙袋を差し出す。

弓子 あたし達なんかいいのにねえ、手伝いに来たんだから。
田中 そう言わずに、ねえ光子さん。築地の魚丸だもの、もったいないものねえ、こんなに
沢山。
沙織 すみません。

と、受け取って行く。

田中 あら、良夫ちゃん！
良夫
光子 弟です。

弓子・沙織　初めまして、この度は……

と、良夫ものすごい勢いで階段を駆けあがって行く。

誠　あれ？

と、ポケットから小さくたたんだピラを取り出す。晃のぞき込む。

このY君ってのは……

弓子と沙織ものぞき込んで、すべてのナゾが解けたような表情になる。

沙織　どうしたの？　これ。

誠　いや、その角のところで配ってたんだよ。

晃　ああ、私も貰ったなあ、良く見なかったけど。

と、やはりポケットから出してみる。

光子　どんな人でした？

を

誠 女の人だったと思うけど、暗くて良く判らなかつたなあマスクかけてたし。

と、突然裏口にすぶ濡れの男が現れる。黒いスーツに腕章をつけ、葬儀の菊の花

持っている。一同ギョツとして見る。

光子 あのこと．．．

男 ．．．今晚は。

光子 あのこと．．．

男 御愁傷様あ。

光子 どうしたんですか、その．．．

男 その池にはまりまして。

と、濡れて文字の消えかかった香典袋を差し出す。

田中 徹夫さんの会社の方ですか、あの葬儀屋さん？

男 ．．．．．

田中 どちら様ですか？

男 井森です。

田中 ああ親戚の方。

男 はい。

田中 光子さん、着替えて貰ったら。

男 いえ結構です。どうせまた濡れますから。

田中 え？

男 いえ。

光子男をじっと観察している。

田中 あの玄関の方に回って下さい。徹夫さんもあちらにおられるので。

**と、同じ姿をした男達がソロソロはいつて来る。みんなずぶ濡れである。
弓子達、帰るに帰れずア然としている。**

田中 あ、あの・・・

別の男 御愁傷様あ。

違う男 御愁傷様あ。

また別の男 御愁傷様あ。

と、やはり濡れた香典袋を持っている。

田中 あの、正面へ。

男 北口からでないと。

一同 北口からでないと。

田中 え？

男 お通夜ですから。

と、一同スルスルと中にはいり、一瞬にして廊下を出て行ってしまふ。

田中 光子さん、お宅田舎どこ？

光子 うちは、田舎なんかないわ。

一同 ……

晃 帰ろう光子さん。

弓子 ええ…

と、沙織と目くばせする。

沙織 じゃ、光子さん、近々また寄ってみるから。

光子 ありがとうございます。姉には私から言っておきます。

田中 お気を付けて。

かず夫、トイレから出てくる。

あんた、また見逃しちやったわよ、スゴイ奴。

かず夫 ええええ？

田中 あっちあっち！

かず夫、嬉しそうに飛んで行く。

光子さん、あの人達親戚なんでしょ？

光子 思い出せないんです。徹夫義兄さんは養子にはいって貰ったんで、井森って言えば家の方なんですけど、父さんの兄弟はみんな戦死したはずですし。

田中 亡くなったお義父さんに隠し子がいたとかじゃあ・・・

廊下にさきほどの男が立っている。

田中 うわっ！

男 腹減っちゃって……

光子折り詰めを取って

光子 これで良ければ。

男 お寿司……？

光子 はい。

食べ

男素早く折り詰めのお包みを解き、中のお寿司の身の部分だけをムシヤムシヤとて行く。

男 もっとおう……

田中、もう一つを差し出す。

男それも器用に身の部分だけをはがし食べつくす。

男 う、う、う、うまい。

光子 たくさんありますから、良かったら皆さんにも。

男 (ニコツと笑って) ありがとう。

と、折り詰めを持てるだけ持って戻って行く。
鐘の音が聞こえる。

田中 光子さん、あたしちよつと見てくる。どういうつながりなのか聞いてみる。
光子 すみません。

てい
の

光子そこらのものを片付けながら思索している。窓の外の一海じつと光子を見る。光子何やらぞくぞくとして辺りをうかがう。台所の屋根の上におびたじい教濡れた黒い男達がへばりついている。
舞台はひっくり返って裏庭になる。
一海が後ろ向きで窓の中をのぞいている。
焼香の鐘の音が連続して聞こえる。

一海 し なかなか覚めないわ。この変な夢。さっき向こうの座敷をのぞいてほとんどびっくり

夢

た。誰かが白い布をかぶせられて横たわっていて、直子ちゃんが大声で泣いてた。しかもつつらの父さんが入って来て、白い布をめくったら、その誰かの顔はあたしにそっくりなの。あたしはちゃんとここにいるのに、やだあたし、夢なんだからね、これは。なにが起きたって不思議じゃないんだもの。ほんの少しの間に三十億年を見てるんだ。

いつの間にかさきほどの男が立っていた。手に折り詰めを下げている。

男 七海。

一海 誰？

男 七海、迎えに来たよ。

一海 誰ですか？

男 忘れたのかい？

一海 あたしはナナミなんて名じゃないわ。一海、カズミです。

男 一海は死んだよ。お前の身代わりになって。

一海 え？

男 迎えに来る約束だったろう？ 十五の誕生日に。お前は井森家の跡取りなんだから。

一海 何言ってるの？ 判った、良夫おじちゃんのお友達でしょ。からかってるのね？
男 時間がないんだ七海。俺達はそう長くはこちらの世界にはいられない。早く記憶の糸
を

たぐるんだ。

一海 そんな顔してもダメよ。私には判ってる。あたしは庭に水をまいているだけ。あな
た

は夢のおじさんなんだわ。

男 父さんだよ、七海、良く見てごらん、お前の父さんさ。

一海 父さんならそこにいるわ、母さんは二階で休んでる。私は一海です。
男 困った娘だ。お前を生かすために、私は6人もの娘を犠牲にしたのに。

別の男が現れる。手に折り詰めを下げている。

別の男 のぼるさん、早く帰りましょう、ここは乾燥しすぎてる。

男 判ってる、七海がぐずってるんだ。

別の男 水でもぶっかけりや思い出しますよ。

一海 嫌よそんなこと。

と、一海が言うが早いか、別の男、庭の水道の下のバケツを持ってきて、一海の頭

からザブリとやる。

何てひどいこと……

男達、バケツの水が自分達にかかると子供のように喜んでる。

男 思い出したかい？

一海の表情が変わって行く。そして一瞬、ムンクの叫びのような顔になったかと

うと、バタリと失神してしまう。

思

別の男 このまま連れ出しましょう。

男 可哀そうだが、しかたがない、みんなを集めてくれ。

別の男 はい。

と、別の男が中に戻ろうとした時、庭のヤブの間から誰かのクシヤミが聞こえ、ヤブが揺れる。声「佐藤さん!」、声「スマンスマン」。

男 誰だ!

ヤブの中から、おそろおそろ立ちあがったのは、誠、晃、弓子、沙織であった。

男・別の男 見たなあ。

誠 見てません。僕、近眼で。

晃 私は老眼で。

弓子 あたしは遠視で。

沙織 あたしは……2・0。

一同 バカ！

男 仕方がない。縛れ。

別の男 はい。

れる。

りあ

と、何か笛のような物を出して吹き鳴らす。人には聞こえぬ、しかし、客席だけに聞こえる不思議な音がする。するとそこら中からぬるぬるした黒い男達が現れ、男達もまた手に折り詰めを下げています。誠達四人を見たこともないロープで縛りあげてしまおう。

誠 だから早く帰ろうって俺は言ったんだよ。

沙織 何言ってるのよ。このまま帰るのは心残りで帰っても眠れそうにないから、裏に回
つ

て様子をうかがおうってあんたが言ったんでしょ？

弓子 そうよね、携帯電話で駅前のビジネスホテル予約したの誠さんなんだから。

晃 そうだ、キャンセルしないと、今日はきつとホテルにも泊まれんぞ。

誠 佐藤さん、嬉しそうに言わないでよ。

晃 だってこんな事件に巻き込まれるなんて、戦時中以来だから、私が南太平洋のガダル

カ ナル島で（とひとしきり戦時中の体験談を話す）

男 サルぐつわをかませろ。

別の男 はい。

誠 佐藤さん！ ベラベラ大声で長話するから・・・・・・・・・・

と、サルぐつわをかまされる一同。

男 出かけるぞ。

男達 はい。

く。

と、庭の隅にあった古井戸から突然水が吹き上がる。

サルぐつわの一同非常に驚く。

男達、誠達四人を次々と井戸に放り込む。そして自分達もスルスルとはいつて行

男、一海を抱き上げ、辺りを見回しながら井戸の中に消える。

辺りはシンと静まり返る。

と、庭の太い木の陰から、かの子と直子が現れる。二人とも制服のままである。

直子 見た？

かの子 見た。

直子 どうする？

かの子 どうするって？

直子 助けに行かなくていいのかな。

かの子 どうやって助けるの？

と、二人古井戸をのぞく。

かの子 …… 涸れてるわ。この古井戸、とつくに涸れてたはずよ。

直子 一海ちゃん、この井戸に落ちたのよね。引き上げられた時、もう死んでたっておば

さ

ん言ってたもの。

かの子　でも生きてた。

直子　うん。良かった。

かの子　うん。

直子　助けなきや。

かの子　うん。

直子　どうしよう・・・

と、井戸の陰からじょうろを持った光子現る。

二人　キャツ！

直子　光子おばちゃん、どうしたの？

光子　腰が腰が抜けちゃって・・・。

と、じょうろを持って花に水をやろうとする。

かの子　何やってんのよ、こんな時に。

光子　落ち着かなくちや、落ち着かなきや、何も考えられないでしよ。

かの子 もう！おばちゃん、時間がないのよ。早く助けないと、一海は本当に死んじゃう

もしれないのにい。

光子 だって、一海ちゃんは死んだのよ。あんなに冷たくなって。あんなに冷たくなった

もう生きてはいられないはずだもの。

かの子 だって見たんでしょ？今の。

光子 だから考えてるのよ。これはどういうことなのか……。私たち、一海ちゃんに生

てて欲しいと思うあまりに、あんな幻覚をみたんじゃないのかしら。

かの子 じゃ、この水は何？枯れた井戸の周りに残る変なニオイのこの水は。

直子 このニオイ、この木に咲く花と同じニオイだわ。栗の花粉のような、生臭いニオイ。

かの子 ほんとだ。あれ？いつの間に咲いてたのこの花。夏に咲いて散ったはずの花が又

り咲いてる。

光子 ……あの時もそうだった。冬にさしかかった寒い日の夕方、せい高イモリ木の

が一斉に花開いた。

かの子 あの時って？

子　　を　　モリ　　言　　い　　騒　　ぎ　　さ

光子　麗子姉ちゃんが井戸に落ちた日よ。

直子　え？

光子　あれはそう・・・一海ちゃんが産まれるほんの少し前。夕方近くになって、突然姉

んがいなくなったの。大きなお腹で事故にでもあったんじゃないかとみんなで大

で庭中を探したわ。でも、その日の夜に姉さんケロリとした顔で、この井戸からは

あがってきたの。花に水をやろうとしてうっかり足をすべらせたのだって、姉さん

ってた。あの日もなぜか、この花が咲き乱れ、その湿ったニオイでむせ返るようだった。それからしばらくして一海ちゃんが生まれたのよ。

直子　　そういうば、どうして枯れたはずの井戸の側に湿地帯にしか見られないせい高イ

木が？

光子　　この辺りは昔から地下水が豊富だね。この先で地下鉄工事が始まるまでは、庭に水

やらなくても、井戸から湧き出る地下水が自然に植物たちを育てていたのよ。私が

や

二人

供の頃には、この辺りは小さな沼になっていて、ガマやオモダカ、ヨシがたくさん生えていた。井戸が枯れ始めてから、麗子姉さん朝に晩に憑かれたように庭に水を
るようになった……。そして、この木だけが残ったの。
・・・・・

と、井戸の底を覗く

生

直子

あの男の人は一体誰なのかしら。

かの子

底の見えない深い井戸から引き揚げられた一海の死体。そして、井戸に落ちても

きていた麗子おばさん。この庭には何か秘密があるのかしら。

奏

と、遠く彼方から種のを練りながら水の人達が現れる。まるでピンザサラを演

しているようだ。

A

点のような生命の先に

B 水の糸細く
 C 消えかかる星の光に
 D 透ける糸の色
 E もう見えない
 F 水はどこから
 A 人の血の海
 B 海から来た人の
 C 血は塩水
 D 一つの海が七つに分かれ
 E 七つの海の血の糸の先
 F 七つの海が水の糸を垂らす
 一同 さあ食らえ 人形ども 母の涙の糸を食らえ

と、方々に散って行く。

光子 直子
 かのうち、今、何かが通り過ぎたみたい。
 いつか遠い昔にこんな気になったことがある。
 懐かしい匂いのする風が頬を撫でていったよう。
 私達の知らない別の国がある・・・

てい

かの子 物語が現実に、現実が物語に変わる世界。

光子 見えない作家が、見えない紙の上に書き連ねた果てのない物語の中に私達が生き

るのだとしたら。そしてその物語が幾通りもあるのだとしたら。

直子 何言ってるの、かのうち。

かの子 あのずぶ濡れの男の人は、一海を七海と呼んだ。一海ちゃんが七つの物語のそれぞ

れ的主人公で、その全部の物語を生きなくちゃならないとしたらこんな風な出来事

も不思議じゃないような気がしたの。

直子 私達はただのワキ役？

かの子 この物語ではね。一海ちゃんは、私達の知らない別の世界に落ちて行った。一海

ちは さんは古井戸に落ちて死んだんじゃない。別の世界に生かされるために、私達の

世 界の物語にエンドマークを記したのよ。

直子 かのうち、あんな変テコなものを見て、そこまで考える人いないと思うよ。

かの子 私もなんだか不思議な気持ちなの。今喋ってるのは私だけど私じゃない。さっき

白い風が通り過ぎた時、突然、こんな風に思ったのよ。私も誰かに生かされてい

る

のだ

って。私達が今ここにいるのは本当のこと？ もしこれまでのことが全部夢な

としたら。それとも、私達の夢を誰かが見ているのだとしたら。

直子 そんな、だったら私達、いない人になっちゃうじゃない。

かの子 はいってみよう。

と、古井戸の側に近寄る。

直子 死んじゃうわ。

かの子 見たでしようさつき。

直子 見たけど。

かの子 あんなことあると思う？

直子 ないと思う。

かの子 でも見たわ。

直子 見た。

かの子 だから行くのよ。私達が今見たばかりの夢の物語の中に。一海に会うのよ。

直子 かのうち、急に大人になったみたい。

かの子 十五だもの、もう大人でしょ。

直子 うん。

かの子 行こう！

直子 うん。

かの子 光子おばちゃん！

光子 ダメよ、私は行けないわ。

直子 どうして。

光子 おばさんだもの。やらなきゃいけない事がたくさんあるのよ。それにこんなことやっぱり信じられないもの。

かの子 今見たのに！

直子 かのうち早くいこう。少女じゃなきゃ行けない世界もあるのよ。

かの子 そっか。じゃ、わたしたち出掛けるわ。お母ちゃんたちには内緒よ、心配するから

と、井戸に入る。

直子 きつと一海を連れて帰るから。

と、井戸に入る。

光子 かの子ちゃん！直子ちゃん！ああどうしよう。私はどうすればいいんだろう。

かず夫あくびをしながらその子の手を引いて出てくる。

かず夫

出ねえな。母ちゃんが言ってたずぶ濡れの変な男ってのもいねえしよ。昨日とおんなじまんまるお月様だし。父ちゃんまた生きる氣力が失せちまった

なあ。

窓が開いて徹夫が手招きする。

徹夫

田中さん、飲みませんか？

かず夫

飲みますか。その子お前帰んな。

その子

その子絶対また見る！ 泊まってく！

徹夫

その子ちゃんもおいで。一晚一海の話相手になつてくれるかい？

その子

うん、なる。恐いけどなる。その恐いのがいい。

徹夫

良夫ちゃん！ 良夫ちゃんも飲むかい？

二階の窓が開く。

掴む。

良夫 俺、いいよ、ここで下手なギターでも弾いてるよ。

と、せつない顔でギターを抱えて何か弾きかけると麗子の手が伸びてその手を

な、なんだよ。

麗子 止めて、また熱が上がっちゃおう。

良夫 うるさいな、寝てろよ。

と、またつま弾こうとする。

麗子 止めて。「禁じられた遊び」は、それだけは。

良夫 なんで？ それしか弾けないもの、それ弾くよ。

良夫、クラシックギターで気の毒なほど下手クソな「禁じられた遊び」をつま弾

き

始める。

麗子 ウ、ウ、ウ。

と、また熱が出る。

一心不乱に弾き始める良夫。

階下からかず夫が「ヘタクソ！」と大声で怒鳴って物差しか何かで天井をつついているらしい音がする。

良夫ギターを弾きながら泣いている。麗子も苦しみながらもすすり泣いている。前の裏庭を田中まさ子に来る。後ろから光子。

田中こめかみを押さえ苦しそうにしている。

光子 大丈夫ですか？ 田中さん、頭痛薬ありますけど。

田中 ……そうじゃないの、頭じゃないの、もっと奥の方。

光子 ごめんなさいね、良夫が下手クソなギター弾き出すから。良夫！ いいかげんにしな

さいよ。

田中 違うのよ光子さん、何か声のようなものが聞こえるの。誰かが私に助けを求めている。

それを私は耳で聞いているんじゃない。体中の血管という血管、ひとつひとつの髪の毛の先まで、体の奥の方で小さな振動が生まれ、それは声にならない叫び声のよう。

光子 田中さん。

田中 そうよ、あれは佐藤さんと鈴木さんの声。

光子 え？ 弓子さんと沙織さん？

田中 いいえ、あたしの原始の親友、原始時代の主婦の友です。あの人達淘汰されたんじや

なかったんだわ。ちゃんと誰かの遺伝子の中に生き続けていたんだわ。

光子 何言ってるんです？

田中 さつき、ずぶ濡れの男達に話を聞こうと近付いた時、あたしの体のどこかにチクリチ

クリと痛みが走った。あの男の沼のような目。あの目に見られたとたん、もう何かは起こっていて、あたしもその何かに引きずり込まれるに違いないと思った。きっとその時、あたしの中に潜む原始の母が目覚めたのかも知れないわ。

光子さん、あたしちよつと留守にするけど、うちの人お願いね。ちよつとそこまで買

い物に行っただって言っというて。

光子 どこに行くんです？

田中 判らない。判らないけど、どっかそこらよ。

光子 何しに？

田中 三分で進化した原始の友を助けに。

ン

と、田中がストップウォッチを取り出した途端、古井戸の中から再び不気味なトネル状のものが現れる。

今度はこんなところから。

光子腰を抜かず。

光子

田中さん、あなた何者なんです？

田中

さあ、とにかくあたし、別の進化に身をゆだねるわ。光子さん、またいつか。娘達によろしく。佐藤さあん！ 鈴木さあん！

と、トンネルにはいつて行く。田中がはいった途端、トンネルは蛇腹のように

な

って古井戸に消える。下の窓が開く。徹夫とかず夫だいが飲んでいる。

かず夫

まさ子、お爛、お爛切れちゃったよ。

光子

あ、あの、田中さん、ちよつと、ちよつとそこまで買い物に。

かず夫

あ、そう。・・・光ちゃん、また明日が来るねえ。ちえつ！

と、窓を閉める。

二階には良夫と、窓によりかかる麗子の影。

光子おそろおそろ古井戸の中をのぞいている。

良夫 光子姉ちゃん、何してるんだよ。

光子 良夫、あんた見てた？

良夫 何を？

光子 ……

良夫 もう寝ろよ。夜勤明けで呼び出されて、おとといからろくに寝てないんだろ？

光子 姉さんは？

良夫 眠ってる。いいよ、俺が見てやるから。光子姉ちゃん、よっぽど好きなんだな。

光子 え？

良夫 その裏庭の古井戸さ。ピーターパンの地下国みたいな別な国への入口なんだつ

て、

昔姉ちゃん真顔で言ってたじゃないか。

『良夫、姉ちゃんはね、あんたの本当の姉ちゃんじゃないのよ。いつか地下国から迎えの使者がやってきて姉ちゃんはそこの女王様になるんだから。』なんて

ち……。

呼

光子

良夫

光子

良夫

俺、赤ん坊だったから信じちゃって、姉ちゃん、行かないで、行っちゃだあなんて、オイオイ泣いたっけなあ……

何だ、忘れちゃったのかい？

昔のことだわ……、遠い遠い昔のこと。

姉ちゃんがいない夜なんか子供の僕はその井戸の中に姉ちゃんを探して名前を

んだりしたのに……。

俺だけ置いてけぼりかあ……。みんな、みんな社会に吸収されて、黒くて固い鎧を着た大人という名前の人になってゆく。どうして俺だけが、そんな進化のできない生き物のまま中途の世界に浮かんでんだろう。

光子

意気地がないからよ。みんなみんな戦っている。自分という小さな世界に潜む醜

い

敵と戦いながら、傷を負い、あがき、叫びながら、明日という時間への抜け道を掘り続けているんだわ。私には絵空事の夢なんかいらぬ。今を生きる知恵があれ

ば。

あたしは、あんたや姉さんとは違うのよ。

と、言いながらも井戸を覗きながら陰に隠れる。

追

良夫

今を生きる知恵だつて？今、今つてなんだよ。今を認識した瞬間に、もうすべては過去にいやられ、ただ記憶として頭の隅に蓄積される幻になるだけだ。これから、起こるであろうほんの些細な未来の出来事も、誰にも予測のできない夢に過ぎないじゃないか。すべては時間の上につなげられた幻の鎖。確かなものなんか何もない。……怖い……怖いんだ……今という時間が地すべりのような音を立てて、俺の体を縛りつける。何も見たくない……何も

聞き

たくないんだ……。

「僕を学校におやりになるのですか！」ピーターは、ぬけめなく質問しました。

「そうよ。」

「それから会社勤めをするんですか？」

「たぶんそうなるでしょうね。」

「すぐおとなになりますね？」

「ええ、すぐですとも。」

「ぼくは学校へ行つて、まじめくさったことなんか習いたくないや。」と、ピーターは、怒ったみたいに言いました。「おとなになんかなりたかないや。ああ、ウエンディーのおかあさん、もしぼくが目をさました時、顔をなでたら、ひげがあったなんて！」おかあさんは、両手をピーターのほうへ差し出しましたが、ピーターはつつ

ぱ

ねました。「はなれていてください。だれもぼくをとつかまえて、おとなにするこ
とはできないんだ。」

と、窓を閉めようとする。

麗子

閉めないで。

良夫

風がつめたいよ。

麗子

窓はあの子のためにいつも開けておかなくちや。

良夫

一海はウエンディーじゃないんだから。

麗子

一海………

と、窓から顔を出す。

一海、カズミ

と、麗子フラリと倒れる。

良夫

麗子姉ちゃん！そうか、夢を見てるんだ……昨日と今日でこんなに違うなんて。

昨日生きてたものが今日には死んでいる。こんなに違うなんて・・・生きた者だけが、こんな違いにさらされるんだ・・・。

暗闇にカズミを呼ぶ声がこだまする。

その声は徐々に小さくなり、七海を呼ぶ誰かの声に重なって行く。ガバと起き上が

る七海、さきほどの一海である。

一海が寝ていたのは、さきほどの井森家の居間であった。居間には縁側があり庭に

面

している。古井戸が別の方角に見える。何もかもが元の家のままのようだ。霧が出て
いる。一海の枕元にじょうろがある。

「ナナミ」と呼ぶ声が近くに聞こえる。

七海（一海）

どれぐらい眠っていたのかしら。永い夢だった。良かった。元通りの私のお庭
だわ。

レイコ ナナミ、七海・・・

呼んでいたのは七海の母レイコだった。辺りが明るくなると、七海の寝ていた布団
を取り囲むようにして、父と母がいる。枕元には洗面器が置いてあり、洗面器で手

を洗っているカズオもいる。カズオ、白衣を着ている。部屋の入口近くにはハンテ
ンを着た男達がいる。

レイコ 良かった気が付いた。

テツオ タナカさん、ありがとうございます。

カズオ あとは栄養のあるものでも食べさせて、冷やさないよう気を付けてあげて下さい。

七海 あたし、庭に水をまいていたのよね。

レイコ そうよ。昨日の夕方、その井戸の前で倒れてたの。ビツクリしたわ。なかなか気が付

かないから……死んでしまったのかと思った……。

七海 あたし、死んでしまった夢を見ていたのよ。あたしが死んだ体も見たわ。あたしそこで
は一海と呼ばれていた。

テツオ 悪い夢を見たんだね。私も子供の頃そんな夢を見たことがあるよ。でも、覚めてしま
えば、ただの夢さ。

レイコ あなた。お忙しいのにお呼びだてして申し訳ありませんでした。

テツオ いやいや無事で良かった。寄合にタナカさんがいらしたので、一緒に来ていただい
て、

本当に助かりました。

カズオ めったに出ない寄り合いに気まぐれで出席したのも何かの縁ですな。

とハンテンを着た男がお盆の上にガラスのビンとグラスを持って現れる。
男はのぼるである。ビンには水色の液体がはいっている。

カズオ

おや、昼間っから酒ですか。

のぼる

お疲れでしょう。旦那様も、こちらで少し休まれてからお出掛けになった方

が・・・。

カズオ

タナカ先生もそうなさって下さい。二階に布団も敷かせましたから。
それじゃ、いただきますかな。

のぼる水色の酒を注いでいく。

のぼる

奥様もいかがですか？

レイコ

私はお茶で結構よ。

のぼる男達に合図を送る。男の一人が出ていく。七海注がれている水色の酒を見てくる。

七海

夢で見た国の空はそんな色をしていた。

のぼる

え？

て

七海 どうして行ったこともないあんな国の夢を見たのかしら。その国の空は青い色をし

いて、その空の色は時間が経つと変わるのよ。

別の男がお茶の道具を持って出てくる。その道具もガラスでできており、赤色のお茶が入っている。赤いお茶を注ぐ別の男。レイコとヨシオに茶を出す。

七海 その空はね、そんな色にも変わるのよ。

レイコ もういいでしょう？夢の話は。

七海 でも、なんだか変な感じがするの。この緑色の空、朝も昼も晩もほとんど変わらない
深緑の空を、なんだか今日初めて見たような気がするの。

レイコ 横になっていなさい。あなたまだ普通じゃないのよ。

色

辺りの霧が晴れてくると奥に沼が見えてくる。その緑色の沼は海のように広く、緑の空とつながっているように見える。沼の鯉が飛びはねる。

霧が晴れてきたわ。

と、縁側に出て

のぼる、男衆に沼の鯉を捕らせて、七海に鯉こくを作っておあげなさい。
しかしまだ解禁日には半月あります。

レイコ 場合が場合ですもの。あなた、寄り合いで話して下さいでしょう？

テツオ ああ、竜神には私から言っておこう。

のぼる かしこまりました。すぐに。金になさいますか？銀になさいますか？

レイコ まだら模様を。

のぼる いいんですか？（と驚く）

レイコ 七海の体のためですから。

のぼる かしこまりました。

と、別の男にめくばせする。男達出ていく。が、一人戻ってくる。

違う男 タナカ様、奥方様が見えられました。

カズオ 何、姫が。

と、一同正座する。

違う男
カズオ
のぼる
テツオ
カズオ
のぼる

舟遊びの途中で知らせを聞いて戻られたのだとか。
余計なことを。誰が知らせたんだ？せつかくうまい酒が飲めると思っ
いたのに。
風です。風が噂を運んだのです。
仕方がありませんな。姫様はいつもおしゃべりな風の子をお供に連れて
ますからね。
全く、たにしかしじみでもあてがえば良かった。
シッ！お見えです。

の の

と、沼の彼方から舟が近付いてくる。舟のへ先を二人の風の子が引っぱっている
北風の子と南風の子である。二人とも緑色の洋服を着ている。それでピータパン
ように見えなくはない。二人ともロープを腰に巻き、空を飛んで引っぱっている
だと思っ。

一同緊張して姫の到着を待つ。

と二人の風の子地上に降り立ち、姫が舟から降りてのち歩いていくだろう道幅
うきではきながら歌い始める。

をほ

風の子

、

誰かが庭に水をまいた。

魚の背のように光るじょうろの、

ハスの実のような出口から、

ほとばしる水、水、水。

と、舟の上にタナカカズオの妻、タナカマサコ現れる。

七海が目を覚ましてからこの家の人々は何やら日本の明治、大正時代を思わせ

裳を身にまどっていたが、マサコはまるで鹿鳴館の舞踏会のようなドレスを着

る。

る衣

てい

マサコ

、その水は糸となり

糸を操る人を生む。

操る人はまた人を生む。

星のいのちを作る人を。

つくる人は庭を作る。

星に運ばれた神の庭を。
神の庭に誰かが水をまく。

その水はどこから

七つの海に分かれる前に、
ただ一つの大きな海があった。

果てのない海の水、

誰かがその水を庭にまいた。

誰かが庭に水をまいた。

魚の背のように光るじょうろの、

ハスの実のような出口から、

ほとばしる水、水、水。

だけ

マサコ歌いながら風の子達が雑草をぬいたりはいたりと、きれいに片付けた道幅

を歩いて、七海がいる座敷にたどり着く。

一同緊張に引きつりながらマサコを迎える。

戻っていたハンテンの男達は硬直して動けない。

七海

オバサン、その歌は何の歌？

よ。
オ

テツオ　これ、マサコ様とおっしゃい。

マサコ　この歌は風の歌、風の子達が噂に聞いた異国の歌ですよ。

七海　私、庭に水をまいていたの。水をまいているうちに立ったまま眠っていたようなの

そして不思議な夢を見た。それはまるで現実のような確かな肌合いのある夢。今、

バサン達の歌を聴いて思い出したの。その夢の初めは、今の歌のように始まったのよ。

マサコ　お前達、この歌をどこで聴いたの？

北風の子　さあ、いつだったか。

南風の子　遠い昔に。

北風の子　噂で聴いただけ。

七海　誰の噂？

北風の子　風の噂さ。

南風の子　風はどんな小さな噂も聞きつけて、

北風の子　オヒレハヒレを加算して、

南風の子　何倍にもして風に乗せる。

北風の子　その風が噂に色を付け、

南風の子　ヒューヒューまた風に乗せるのさ。

二人　風はいたずら御用心御用心。

七海 良夫おじちゃんのビラ、あんた達の仕業だったの？

二人 は？

七海 やだ、夢の話だったわ。

マサコ でも良かった。七海ちゃんが無事で。だって私が風に聞いたのは、もう亡くなったっていう噂でしたもの。

― 同顔をピクリと引きつらせる。 ―

とるものもととりあえず、ただもうあわてて風の子達を走らせて、あんまり私が急かせたせいで、西風の子と東風の子に逃げられてしまいましたわ。これでもう、私、南か北にしか出かけられなくなってしまいました。

カズオ 北風の子と南風の子も逃がしてやりなさい。気の毒じゃないか。世界を飛び回り

いだらうに。

マサコ あなた、風のいのちは永遠なのです。風のいのちに比べたら、私達のいのちなど

な

いのも同然。束の間の氷の粒のようなもの。私はただこの子達に遊ばれているだけ。この子達はいつでも好きな時にスルリとどこかへ消えていくんです。

た

と、のぼる達が座敷に運んできたマサコ専用のイスに座る。

あら、お酒。

のぼる 召し上がりますか？

カズオ 七海ちゃんの無事を祝って、乾杯しよう。

テツオ 七海もちよつとなめてみるか？

レイコ いけません。まだ子供です。猩猩になってしまいます。

七海 猩猩？

レイコ 大酒飲みのサルですよ。

七海 私は昔、そんな名前と呼ばれていたことがある。

マサコ あなた、本当に七海ちゃん？

レイコ マサコ様、七海はまだ普通じゃありませんの。一晚人事不省におちいつていたも

ですから。七海休んでいなさい。

マサコ そうだ、レイコさん、実はまた、種を少々分けていただきたいの。

テツオさん、寄り合いで聞かなかった？泉男爵の御令嬢、また着床しなかったという話。

テツオ うかがいました。

マサコ 男爵も三度目の正直とは申しておりました。私、卵をあずかってまいりましたの

の

よ。

代金はまだら鯉の稚魚三百匹ではどうかと。

テツオ のぼる、どうだね？

のぼる 手を打ちましょう。

カズオ テツオさん、いつも思うんだが、どうしていちいちのぼる君にお伺いを立てるんですか？

すかな。この種屋の主人はあなたでしょう？

小 テツオ いや、私はこの屋の番人にすぎん。大事な種が盗られぬよう、あのやぐらの上の

屋に住まって、見張りを続ける。代々種屋を営むイモリ家の主はこのレイコで、種を育てるのはのぼるの仕事。私はその番をするためにこの屋に養子に入ったんですよ。

七海 種って何？

レイコ 大人になったら話してあげます。

マサコ 卵は舟床に積んであります。こちらにお渡ししていいですね。

レイコ かしこまりました。

マサコ では、風の子達に運ばせます。

風の子飛んでいく。

七海 あたしおなががすいたわ。
レイコ そうだ鯉こくを。
のぼる あいにくまだら鯉を取りそこねまして、いまだ格闘中とのこと。
レイコ それではそれまで、あれで腹ごしらえ。
テツオ そうしよう。

はが

と、一同自分の後ろから例の折り詰めを取り出して魚丸の紙包みをペリペリと

す。

ア然として見ているマサコと七海。

一同寿司の身の部分だけをひっぺがしてうまそうに食べる。

と押し入れの中から携帯電話の着信音が聞こえる。

一同ビクリとする。

マサコ あれは？

一同 さあ。

レイコ のぼる。

のぼる はい。

と、のぼる押し入れの中にはいつて閉める。何か人をひっぱたくような音がして静かになる。

レイコ 七海も食べなさい。

と、折り詰めを一つ勧める。

七海考え込んでいる。

のぼる何事もなかったかのように押し入れから出てくる。

良夫、ポテトチップスを食べながら二階から降りてくる。七海の布団に気が付い

て

良夫 あれ？こっち、移したの？

一同 ……

寿司を食べる手を止めて良夫をみる。

良夫 気持ちは判るけどさ……何だよ、姉ちゃん、俺には食うなって言つといて、食べてるじゃないかよ！ずるいよ！何だよ、結局余ったんじゃないか、俺にもよこ

せ

よ！

と、一つ取って、食べ始める。

七海 あのこと……（と、布団から起き上がった）
良夫 ワツ！ 姉ちゃん、助けて！

と、レイコに抱きつく。

七海 良夫おじちゃん……？

一同ギョツとして飛びのく。

丁稚達 ヨシオ坊ちゃんだ！ヨシオ坊ちゃんだ！
レイコ 静かにしなさい。ヨシオは三年前に流行病いで死んだはず。
テツオ じゃあ、ここにいるのは……

カズオ、良夫の脈をはかる。

稽

カズオ　生きてますな。
のぼる　・・・と、いうことは・・・
レイコ　のぼる！

一同、良夫が人間界の良夫だということを知り、緊張するが、マサコに悟られぬよう平静を装う。

マサコ　どうしました？

テツオ　何でもありません。

マサコ　あなた、ヨシオさん？

ヨシオ　何だよ田中さん、そんな恰好しちやつて。・・・ハハハ、みんな町内会の余興の

古かい？

レイコ　マサコ様、ヨシオは病のせいで少し頭が・・・

テツオ　そ、それで、亡くなったことにして、裏の種蔵に三年間閉じ込めておりまして、

はい。のぼる、ダメじゃないか。ちゃんと見張りを付けとくように言っただろう？

のぼる　は、申し訳ありません。ヨシオ坊ちゃん、早くあちらへ・・・。

良夫　何言ってるんだよ。光子姉ちゃん、みんな何きどってるの？

レイコ 私はレイコです。

良夫 麗子姉ちゃんは二階で寝てるよ。何言ってるんだよ。

のぼる 丁稚達に合図を送ると丁稚達、良夫を取り押さえる。

何だよ！あんたら、弔問客かい？違うんだよ。俺は、通り魔じゃないって！誤解だよ、誤解なんだよ！嘘なんだって、あのビラは！

マサコ 離しておあげなさい。テツオさん、ヨシオさんも病でなければここの跡取りに

なられたお方。私が後で良い薬を差し上げますから。

テツオ ははあ……

一同 ははあ……

と、手を離す。良夫、マサコの後ろに隠れる。

風の子達がちょうど卵の入った大きな貝殻のような箱をかついでくる。

驚く良夫。

のぼる それではマサコ様、始めますから。

マサコ よろしくお願いします。

風の子水色の酒の入った一升瓶の束を縁側に置き、どこかに飛び去ってしまふ。

これは私からのお礼です。皆さんで召し上がって下さいな。

のぼる ありがとうございます。

一同 ありがとうございます。

のぼる みんな、まず一仕事だ。

一同 は。

のぼる 子供が見るものじゃない。閉めますよ。

と、七海に言って縁側に面した座敷の障子をバタバタと閉める。

のぼる達、中の卵を取り出す。それはカエルのそのように長いぬめぬめした透

ヒモ状のもので、腸のようにフニャフニャしてとぐろを巻いている。男達、掛け声

掛けながら、それを古井戸の中に放り投げる。古井戸から飛び散る白い液体。

明の

を

のぼる これで大丈夫だろう。

別な男 今度は種の井戸にじかに入れましたからね。

のぼる 何人生まれ、何人生き残れるか……

サ

別な男

酒でも飲みながら待つことにしましょう。

男たち襖の中に入り、皆で酒を飲み始める。男たちの儀式を覗いていた良夫とマ

コ。良夫、大いに驚いている。

良夫

田中さん、俺、夢でも見ているのかな。どうなっちゃったんだよ、この家は・・・

マサコ

しっ！皆、お酒に入れた眠り薬で眠ってんだから。良夫ちゃんこそ、どうしたの

どうやってここまで来たの？あたしなんか、三十五億年もかけて来たっていうの

よ。
に。

良夫

ええ？

マサコ

詳しく話している時間はないわ！あたしには大切な使命があるんだから・・・

と、襖の中に立ち去ろうとする。

良夫

そりゃないよ、田中さん。ここはどこなんだ。俺は一体どうなっちゃうんだよ。

マサコ

後で必ず助けに来るから。

と、去る。

良夫 まいったなあ……

と、井戸の側までくる。井戸を覗いて白い液体に指を突っ込んでみる。

良夫 気持ち悪い……誰だよ、こんないっばい出したの。

と、直子井戸から出てくる。驚いて飛びのく良夫

直子 やだあ、これ、なあにベタベタする。変なニオイ。

と、井戸から顔を出す。

あれ？かのつち！、かのつち！。

私達、元来た場所に戻って来ちゃったみたいよ。また、一海んちの庭に出ちゃった。

良夫 直子……だよね。

直子 あっ！良夫おじちゃん！

と、井戸から出る。

良夫 良かった。本物の直子だな。

直子 何言ってるの？

良夫 お前が方々で言いふらすから、話が膨らんでこっちは犯人扱い。もう就職もできな

い
じゃないか！

直子 何よ、働くつもりもないくせに。それに、おじちゃん、犯人よ、犯人じゃない！

良夫 事故だって言ってるだろ！ちよつと待った！それどころじゃないんだよ。良く見ろ

よ。

直子 ええ？

良夫 生臭くて、湿った空気、どんよりとした深緑の空。ここはいつもの庭じゃない。

直子 このニオイ・・・一海をさらって行ったあの男たちと同じニオイだわ。

良夫 ええ？

と、かの子井戸から出てくる。

かの子 気持ち悪い・・・。

直子 かのっち！

良夫 かの子も一緒だったのか？

かの子 良夫おじちゃんどうしたの？ここはどこ？

と、出てくる。

直子 かのつち見て！

と、後方の沼に気が付く。

良夫・かの子 ああ！

直子 あれは海？

良夫 湖だ、大きな湖。

直子 かのつち、この空、昼でも夜でもないような緑色をしている。

と、障子が開いて七海が現れる。

七海 あれは海よ。

直子 一海……

七海 空の海。沼が海に続いている。緑の空の海が沼にうつって、だから沼も緑色。緑色の

う？
ひ
に
て

風がいつもビュンビュン吹いている。

かの子 やっぱり生きてたんだね、帰ろ一海ちゃん。

七海 あなた達は誰？

直子 何言ってるのよ！

七海 あなた達・・・夢の人たちね。やだあたしまた夢を見ているんだわ。

直子 かのうち、これはやっぱり一海の見ている夢の中なの？かのうち言ってるでしょ

一海は七つの物語のそれぞれの主人公で、物語から物語へ渡り歩くために、ひとつ

とつにエンドマークを記すのだった。

かの子 うん・・・

直子 それならかのうち、もし私達が一海を連れて帰ることができたとしても、元の物語

は戻れないってこと？

七海 あたしは、一海で、七海の夢を見ているんでしょう？それとも七海が一海の夢を見

ているの？

直子 かのうち、私達の人生ってただのお話だったの？

かの子 ええ？

直子 私達が物語のただの脇役だとしたら：去年の夏休みに三人で出掛けた植物採集も、
小 学校の修学旅行で一海に突然初潮が訪れて大慌てで保健の林先生たたき起したこ
と も、先月私が通り魔にあつて八針縫つたのも、みんなみんな物語？十五年間の長い
長 いたただのお話なの？
かの子 ……そういえば私達、ちよつと変よね。
直子 え？
かの子 今時の高校生って、こんなに熱く語るかしら。友達の為に身を危険にさらして、
こ んなとこまで助けに来るってあるのかな。
直子 かのうち、あたし達が誰かの記憶の中の高校生にすぎないって言ってるの？
かの子 TVゲームもコンピュータもやらないで毎日部活で汗流してるしさあ。これは
昭和
四十年代の高校生って感じじゃない？
直子 一海あんたほんとはオバサンなの？
七海 あたしは十五になったばかりよ。あたしは庭に水をまいていたほんの少しの間
に別

の十五年を夢見ていたのかしら。

良夫　ちよっと待ってくれよ。俺はどうなるんだよ。これが一海の見ている夢で、一海が主

人公の物語なのだとしたら、俺は何でここに居るの？あんなら、乙女チックな脇役で済むかもしれないけど、俺は付き合いきれんよ。ばかばかしい。大体俺の今までの人生自体がただの通行人みたいなんなんだ。くそう！人の夢の中でまで……。まで

よ。俺は今さっき二階から降りてきただけなんだよ。ギター弾きながら、ちよっとウトウトして、それで……。あっ！俺もしかして……。あのまま麗子姉ちゃんの隣で眠りしちやっただのかも……。そうか……。これは俺の夢なんだな！なんだよ、だっ

ら俺が主人公じゃないか！

と、一同蹴散らし中央に入る。

一海がこうして生きて動いているのも、直子が生意気な口たたいているのも、俺の見ている夢だからなんだ。

七海　違いわ！私は七海で死んだヨシオおじちゃんの夢をみてるんでしょ？

良夫　どうなってんだよ、一体！

タナ

と、障子にイモリの影が映る。

男達飛び起きる。そして妙にゆっくりした動きでかの子達に近づいてくる。

座敷の障子がバタバタ開くと、両生類のあのイモリに変身したイモリ家の人々と

カカズオ、ソノオが折り詰めをむさぼり食っていた。

かの子、直子、七海、驚いて声にならない。

イモリ達、寿司をくわえたまま、かの子達を見る。

七海 ……あたし……イモリだったんだ……

かの子 何感心しているのよ、あんたは昔から井森でしょ？あれ、井森一海はイモリの一

海？

良夫 『この古井戸は別な国への入り口。そこを抜けると地下の国がある。サルからでは

な

く、両生類から進化したイモリの人々が静かに笑いながら私がいつか帰るのを待

って

いるの。』これは昔、光子姉ちゃんが話していた国じゃないのか……。

これは光子姉ちゃんの作り話だ。しかし、作った本人がもう忘れてしまった夢の中

に、

神

どうして俺達が……。

のぼる

お前たち、あの通夜の席にいた者達だな。あいつらと一緒に閉じ込めておけ！ 竜

に知れたら大変なことになる。

と、イモリたち、三人におそいかる。

七海

やめて！起きてても起きててもまた夢になる。いつになったら覚めるのかしら。

と、押入れの戸が開いて、ロープでぐるぐる巻きにされた誠、晃、弓子、沙織が倒れ込む。

直子

あっ！おばさん達！

を機

男達また妙にゆっくりな動きで振り返り、今度は四人の方に向かう。七海その間
敏に駆け抜け、誠達のサルぐつわをはずす。弓子と沙織、七海見て悲鳴をあげる。

沙織

どうも、ありがとう一海ちゃん。……カ、カ、弓子、弓子、出たわ。出たわよ。幽

霊よ、幽霊よ。

弓子 落ち着きましよう、沙織。これがどういうことなのか、きちんと整理して考えてみ

ま しょうよ。

晃 さ 考えたってもう駄目だよ。私達は細かくきざまれてミンチにされて、沼の鯉のエサに

れちやうんだから。今さらジタバタしても仕方がないさ。な、さっぱりとあきらめて、
みんなで座禅でも組もうじゃないか。

誠 め 佐藤さんは、もう充分生きられたからそんなこと言ってられるんですよ。私はあきら

切れませんね。明日、どうしたって出向かなきゃいけないところがあるんです。朝10
時に経堂の駅前で待ち合わせしてるんですよ、お客さんと。

今回はいけそうなんです。乗り気なんですよ、先方は。私、四十過ぎてから三回ですよ
転職したの。入る会社、入る会社、全部傾いちゃって。

まさか、私が不動産会社の営業やるなんて、大学の頃は思いもよらなかつたですよ。も
う今のところがダメなら、もう自殺するしかないですよ。

晃 なんだ、じゃちやうど良いじゃないか。どうせ自殺するのなら、殺されたって。
誠 たとえですよ。それだけ必死だつてことです。

沙織 こんな時に何言ってるのよ！今、何をすべきかを考えるんでしょ！

誠 嬢 だいたいお前と一緒にになったのが、つまづきの始まりだったんだよ。あの時部長のお

さんとお見合いしていれば・・・

沙織 何でも人のせいにして！私だってね、結婚前の方がずっと幸せだったわよ。鈴木さん

の奥さん、仁ちゃんのお母さんなんて言われて、名前までなくしちゃってんですからね、結婚前は人生のヒロインだった私が！

誠に を！この・・・

と、二人縛られているため、自由にケンカもできないでいる。

弓子 だからね、考えましようって言うてるのよ、あたしは。私達は一海ちゃんのお通夜

に 来て、麗子の親戚だという男達に古井戸に落とされた。そして気が付いてみると、

麗 子 の家と寸分たがわぬ座敷の押し入れの中に閉じ込められていた。これはどうい

うこ

となの？これが現実だとしたら、そうとう不思議なことだわよ。

一同

・・・

東 人

晃 弓子さん、あんた今頃何言ってるんだい？

弓子 え？

晃 う こんなこと冷静に一つ一つ分析できるような事態じゃないことはみんなとつくと

に知ってるんだよ。だからあわてているんじゃないか。

弓子 え？あわててる？どうして？

一同 ……

晃 だからね、私が戦時中、ガダルカナル島で…

と、晃がまた戦時中の話を始めた時、ようやくイモリ達、四人の周りに到着し四

を押し入れに押し込めようとする。かの子と直子もロープで縛られ、四人と一緒に

にされようとしている。抵抗して騒ぐ六人。

七海 あの人達をどうするの？

のぼる 細かくきざんでミンチにして、沼の鯉のエサにするんですよ。どうせここでは長

く 生きられない。

七海 そんなことさせないわ。私、あの人達と一緒に帰るんだから。

のぼる 何言ってるんだ、お前はここに帰って来たんだよ。言っただろ？お前は私の娘なんだ
だ

って。

七海 ……

のぼる この古井戸をごらん。この泉は海が七つに分かれる前の一つの海につながっている。

私の種がその海の栄養を吸って育っているのさ。お前はここで生まれたんだ。

七海 私は父さんと母さんの子じゃないの？

のぼる 私はこの村の種主。子供らはみんな私の種さ。

七海 古井戸にあふれるこのヌルヌルした白い液体、これが私の父さんなんですか？

のぼる そうさ。お前の母さんの七つの卵が孵化して、一海・二海・三海・四海・五海・
六

海・七海の七人の子が生まれた。お前はね、七海、この七人すべてであって、一人
でもある、稀有のいのちだ。お前の体にはこの七つの記憶が流れているのだよ。

七海 白い布をかぶった私の死体、あれは夢ではなかったの？

のぼる あれはこちら側で育った七海の死体さ。

七海 え？

のぼる お前であってお前ではない。私が夕べすり替えたのさ。もう二海から六海まで五

人

の子供がこちらでは育たなかった。五人とも、神かくしにあつたように、フイとどこかに消えて行く。こちらの世界との縁が薄いのか、別の流れに身をまかせたのか、代々イモリ家の娘は異世界に泳ぐ癖を持っている。これは私の種が、この海の井戸で育つためなのかも知れないが……。七番目の七海だけは十五の歳までこちらで生きていた。イモリ家跡取りとしてこの種屋を守って行くはずだった。それがなんとしたとか、不思議な夢にうなされ、そのまま別世界に、そう死という異界に連れ去られてしまったのだ。一海という名のお前の力に引き寄せられ、いのちの花がしぼんでしまったに違いない。

の？

七海　私の他の六人の姉妹が、私という一人を生かすためにいのちを費やしたという

のぼる　私はそうだと思っている。レイコ様が異界に去られる去りぎわに、私と取り交わし

た約束は、もし七海が育たなかったら、一海をこちらに取り戻すということだった。

七海　え？今何て言ったの？

のぼる　レイコ様は七人の子のうち、一海一人を連れてあちら側に行ってしまったわ、イ

モ

り家の方だ。

七海　でも、さっきこちらのお母様はあそこに。

のぼる あれはミツコ様だ。種屋の主があちらとこちらを行き来する魔性の者だと知れたら、

竜神の逆鱗に触れ我ら一族もろとも、あの海の空に吸い上げられ、この地も沼の底に沈むであろう。

七海 あれはミツコ伯母様だったの？

のぼる これは私とミツコ様だけの秘密。旦那様とて御存知ない。この秘密を知ったからに

は、必ずこの地にとどまり、この世界を未来永劫支えて行かねばなるまいぞ。

七海 竜神って誰なの？

のぼる この地を作った大いなる者、神と水との間にある知恵の長老だ。

と、のぼるのポケットの携帯電話が鳴る。

まただ、さっきあいつらから引ったくったこれは一体何なんだ。

七海、のぼるの手から携帯電話を受け取り電話に出る。

七海 はいはい、鈴木さんは今手が離せなくて、え？ホテルオギクボ？はあ、キャンセルし

誠
て構わないと思いますけど、すみません・・・良く言っておきます。
一海ちゃん、030-54-13412。会社に電話してくれる？絶対行きますから

つて。くそう！死んだって行ってやるう。

と、イモリたち襲いかかる。

良夫
ああ、姉ちゃん、姉ちゃん、嫌な夢だよ、助けてよ、姉ちゃん！

と、二階の窓が開く。浴衣姿の麗子が起きあがる。二階の部分だけは元の井森家

の
二階のようである。

麗子
変な夢。熱のせいだわ。光子、光子！誰もいないの？一海、一海・・・

そうだった、一海は・・・

でもそんなはずないわ。一海はきつと帰ってくる。私は一海が死んだ夢をみてい

る
だけよ。熱が下がれば、また元通りの生活が始まる。昨日と変わらない静かで退屈
な暮らしが・・・私がほしかったのは、そんな退屈な現実という世界だつ

た．．．。

と、良夫がガバと起きる。

良夫 姉ちゃん、助けて、姉ちゃん！

麗子 どうしたの？

良夫 良かった助かった。悪い夢だ．．．。

麗子 良夫、あんたは今、私の見ている夢の中の良夫でしょ？私は今、一海が死んだ夢を見ているのよね。

良夫 何言ってるんだよ。今、夢から覚めたばかりの人間に変なこと言うなよ。

麗子フラフラと立っていられない。

良夫 医者行った方がいいよ姉ちゃん．．．

麗子 ダメよ今は。だって一海が．．．

良夫 何言ってるんだよ姉ちゃん．．．

麗子 そうだ、ねえ良夫、光子、庭に水をまいてくれたかしら．．．．
良夫 しっかりしろよ．．．．

と、突然水の人達が二階の部屋に現れる。

A 続きは？

麗子 え？

B 続きはどうするんだ。

麗子 あなた達は誰？

C お前の物語を語る父さ。

麗子 私の物語を？

D 水をまいたのはお前だろ？

麗子 え？

E どうして弱るんだ、この人形

F もつと食えよ俺達を。

麗子 何を言ってるの？この人達、良夫、この人達は誰なの？

良夫 姉ちゃん、どうしたんだ？

麗子 良夫には見えないの？この白い人達が。

良夫 え？

麗子 腐ったパンみたいな変な臭い。

A お前の体と同じニオイさ。

B 私達の血はお前の血。

C お前が孕んだ人形どこ行った？

D お前はお前の人形にお前の物語を語らせるんだ。

麗子 光子！光子！早く来て！この化け物達を追い払って！

良夫 風が吹いてるだけだよ。このニオイは、．．．一海．．．。地に帰る死者のニオイか

一同 も知れない．．．
食らえ、もっと食らえ、俺達の指を。

麗子倒れかかる。

良夫 姉ちゃん！姉ちゃん、しっかりしろよ！すごい熱だ！光子姉ちゃん、麗子姉ちゃん

が．．．ああ、なんだ、また眠くなってきた。重い、重いよ、麗子姉ちゃん．．．

と、良夫もまた倒れ込む。

良夫 お姉ちゃん！光子姉ちゃん、麗子姉ちゃんが．．．

階下では人間界の六人がイモリ達に殺されようとしていた。

七海　私がもし、七海でもある一海ならこれも私の夢なんでしょう？だって私は庭に水を
ま
は
いていただけなもの。だったらこの人達は私が生んだ子供達だわ。私が助けられる
はずよ。

と、突然六人のロープがハラリと落ちる。

イモリ達　ヤ、ヤ、ヤ、ヤ
誠　これは一体。
晃　とにかく逃げよう。

出な

自由になった六人でんでに逃げまどろが、イモリ達の不可解な攻撃に手も足も
い。と押し入れの中から突如、例の蛇腹のトンネルがニューと突き出る。
その中よりマサコが現れる。

マサコ　佐藤さん、鈴木さん、こっち、こっち！
誠　井森さんちの筋向いの田中さんかい？

す。

マサコ あちらの世界ではそうでした。思い出してよ、原始の頃を。私、あなた達を助ける

ために、もう一度別の進化をし直して、待っていたのよ、あなた達を。三十五億年
永かったわあ。

カズオ お前、裏切るつもりか？異界の者の手助けをする気か！

マサコ 私の古里はここでもあそこでもない。この蛇腹鏡の果てにある原始の森なので

誠 ううん判らん。田中さん、あんたは誰だ、そしてここは一体どこなんです？

マサコ 誰かが庭に水をまいたのよ。

誠 え？

マサコ それで別の進化が始まった。私はいったん海に帰り、もう一度庭にまかれる水と
な

り、サルではない別の生き物に進化した気がする。

晃 しかし、どうして田中さんが・・・

マサコ 助けを呼んだでしょ？あの声を聞いたのは私の遺伝子なのか、第三の耳なのか、
と

にかく早く！このままここにいたらあなた達消えてしまうわ。あなた達はここ

には

いないはずの人達ですもの。早くこの中へ。そしてもう一度進化の旅を繰り返す

ん

です。

入りかけた一同驚いて戻ってくる。

一同　えええ！

誠　もう一度進化し直すの？それやだなあ・・・

沙織　あなた、私、殺されるよりましだと思う。行きましようみんな。

誠　やだよ、もう一度人生を送り直すなんて。別の人生ならまだしも、同じ失敗、同じ挫折を繰り返し、またお前と一緒にになるなんて。

マサコ　五分とかからないから、早く！

晃　よし、行こう！

誠　時計は五分でも中身の経路は一緒だろ？俺は今帰りたいんだよ、今！明日の十時に

経　堂駅前なんだよ！くそう携帯電話とられちゃったから、電話もできんよ。

七海　これですか？

と、持っていた携帯電話を出す。

誠　あつ！それ、それ。

と、七海が持っていた携帯電話をひったくる。

電話をかけようと古井戸の近くまで逃げる。

と、古井戸の中から黒いイモリの子供達がわいて出てくる。

ああ、こ、これは……………

小さなイモリが誠の体にまとわりつく。

『もののけ姫』が満員で入れず、仕方なく見た『ロスト・ワールド』の二コマのよう
な……………

た、助けてくれ、何か武器になるものはないのか……………
のぼる 孵化したぞ！

イモリ達古井戸の周りに集まって来る。

早くビンに入れないと、沼に落ちて鯉の胃袋に。俺はこいつを！

と、何か特殊な武器を片手に誠に襲いかかる。誠とっさに携帯電話のアンテナを

伸

ばして切りつけるとなぜかのぼるの腕が切られて地面に転がる。

誠

携帯電話が、携帯つるぎに、こんなバカなことが……

人間界の一同何か武器になるものはないかと自分の体をさぐり、お通夜の数珠、

塩な

どを使って、今、イモリと化した異界の人々と戦い始める。のぼるの切られた腕は

す

ぐにはえてくる。切られても切られても腕や足がまたはえてくるイモリ達に人間

界の

一同ガク然となる。

かの子と直子も想像を絶するやり方で応戦する。

七海は良夫に守られ、戦いのスキ間をスルスルかわして庭の中にいる。

トンネルの中から戻ってきたマサコ。

人間達には田中さんと助けを求められ、イモリ達にはマサコ様と助けを求められ、

ど

うしてよいのか判らなくなる。しかもかの子との二役なので、戦いの途中で入れ替

わ

ったりと忙しい。
と、イモリの子供が生まれ終えた古井戸の中から麗子がい上がってくる。
そして七海を手招きする。

麗子 一海ちゃん、一海ちゃん。

七海 ……お母さん……

麗子 帰りましょう一海ちゃん、早く井戸の中に。

七海 でもあたし、のぼるさんと約束したのよ、この世界を守っていくことを。

麗子 ここはね一海ちゃん、あつてはならない場所なのよ。あなたが戻ればこの世界は消え
え

てしまう。それでいいのよ。あなたは現実の街で生きて行かなければ。

七海 あたしには判らないの。なにが嘘で本当なのか。

麗子 あなたは私の子。これ以上の本当はないわ。私はあなたをなくしたくないの。

七海 お母さんがそんなこと言うなんて、お母さんが私のことに興味があつたなんて知

らな

かった。

麗子 ……どうしてそんなこと……

七海 あたしは、いつも一人なんだと思つてた。毎日一人で朝ごはんを食べて、お弁当を
こ

か

れ　そ　ら　れ
麗子　よ　一

さえて出掛けて行く。部活を終えて帰ってくると、田中さんのオバサンが買ってきたおそうざいを食べながらテレビを観るの。「好きだ、愛してる！」って絶叫するテレビをね。でも、どれも嘘、自分がどうしてここにいるのかってという答えは見つかない。私は誰も好きじゃない。誰からも好かれてもいない。鏡の中の自分を見ても、自分で自分に興味が持てないの。私は私が主人公の物語を作ろうと思った。でも、それがどういふことなのかさえ考えることができなかった。私は今まで、誰かに見られていた気がしないのよ。誰かに思われていた気がしないのよ。たぶん私も何も感じていなかったんだわ。

私の体は薄くなっている。流れる血も皮膚も薄く冷たいの。それでも私は生きていなくちゃならないのかしら？

……一海、お母さんはね、言葉なんていらないうちで思っていた。幾千幾万の言葉り、もっと大事なものがあるとは思わなかった……そう思っていたのよ。帰ろう

海、お母さん、最初っからやり直すから。

のぼるが近づいて来る。

のぼる

約束だよ。一人で帰るんだ。元はと言えば君のわがママが原因じゃないか。

こちらからは見えず、そちらからも見えない二つの世界の秩序が壊れ始めたの

は君

が向こう側の夢を見始めたからだ。

麗子

一海！一海！

のぼる
この子は私の子だ。

のぼる、麗子を古井戸に放り投げ、フタをしてしまう。

戦い激しくなる。

戦いの途中でトンネルに消えていたマサコ、トンネルから戻ってくると原始人

中に変わっていた。

の
田

田中

佐藤さん、鈴木さん、思い出してよ。私達、小動物絞め殺して同じ釜の飯を食った原始の主婦の友よ！

減

佐藤、鈴木、気が付くと、二人とも原始人に変化していた。

鈴木 思い出したわあ、佐藤さあん！
佐藤 バカバカしいけど、こうなったら、小動物絞め殺すしかないわね。

と、二人、イモリ達をちぎっては食べ、ちぎっては食べし、イモリ達の数が徐々に
って来る。

沙織 うちの人、先祖返りしちゃったみたい。

弓子 これはどういふことなの？きちんと順序立てて考えなければ。沙織！もしこれが
現

実なら、さうとう不可思議なことじゃない？

等と言いながら、戦っている。
のぼる形成不利と見たのか、屋敷に火を放つ。沼に逃げようとするイモリ達、煙
にむせる人間達。

し

田中

一海ちゃん、あなたが産み落とした進化する種は、この先どんな風に生きられるから。もうすぐ終わるであろう、この進化の先にどんな世界が待っているのか、おばさんにはわからない。でも一海ちゃん、おばさんまた進化するから。何度でも、何度でも、だからまた水をまいてちょうだい。

良夫、階上で水をまく光子の姿に気が付く。

良夫

光子姉ちゃん！

階上の光子、ふと誰かに呼ばれたような気がして振り返る。

一海！水を、庭にまくんだ！

七海持っていたじょうろで水をまく。天井より無数の細い糸。

雨だ。懐かしい雨だ。

俺はゆっくりと進化する。別の宇宙の別の星で、ゆっくりとまたヒトになって行く。う。

と、一同人形のように硬直し始める。

麵を打つ音が響き渡る。

辺りは混沌の間にかえって行く。

混沌の中、三人の原始人と七海が歩いている。

鈴木 どこから来たの？

佐藤 まだ思い出せないの？

七海 ・ ・ ・ ・ ・

佐藤 ゆっくりでいいよ。時間はあるんだ。星の分だけの時間がね。

七海 私は、私のお庭で道に迷っただけなのかしら。

田中 あんたのお庭？なんであんたの庭に私達がいるのよ。

鈴木 あとどれくらいかかるのかしら。

佐藤 何が？

鈴木 あたし達が人になるまで・・・

佐藤 ゆっくりでいいってば。考えているうちに、もう考えていたことさえ忘れるのよ。

き

つと。

田中 あっ！

一同
田中

何？

ホラ、今、星がひとつ消えた。

一同、消えた星を見つめる。
水の人達が現れる。

A B C D E F A B C D C B A E F E D C B A E C D C B A E

何をしている？

練ってる。

同じことの繰り返しだ。

人形め、食いそこねやがって。

糸がからまったからさ。

見えない糸なの？

見えないからからまったのさ。

またやり直した。

何をしている？

練ってる。

俺達は練ってるだけか。

練りながら考えてる。

何を？

F A B A C E C B A B C B A F C F E F A

何か、物語を。

俺たちは……

何だ？

誰なんだ。

語る父だと言ったろう。

何を語るんだ？

何か、物語を。

一人足りないぞ。

誰が。

七人いなかったか？

六人だろ始めから。

七人いたはずだ。

食われちまったんだろう。

誰に。

人形にさ。

見えない糸の先にぶら下がってんだ。

そうか……

とにかく作るんだ。

何を

- D 物語を始める人形の口を。
A 俺達の唾液で。
D 体温で、
C うどんのようにもろく、
B 木綿のように丈夫な、
一同 物語を始める人形の口を。

舞台明るくなると水の人達の手前に庭が生まれる。

誰かが水をまいている

光子である。

良夫現れる。郵便配達夫の格好をしている。

良夫 お姉ちゃん。
光子 ……
良夫 雨が上がったね。
光子 え？今何か言った？
良夫 何してんだよ。
光子 水をまいてたの。
良夫 雨が降ってたのに……

光子 気が付かなかった。

良夫 しばらくここにいてもいいかい？

光子 仕事はいいの？

良夫 ……

光子 こうやって水の先を見ていると、ここにるのが誰なのか判らなくなってくる。

良夫 え？

光子 私がよ。ここで水をまいているのは私じゃなくて別の誰かのような気がしてくる。

良夫 麗子姉ちゃんもそんなこと言っていたな。この庭に水をまきながら。

光子 あたしは姉さんの代わりに、姉さんの夢を見ているのかしら。

良夫 本当に、ここに一人で住むのかい？

光子 ええ。ここは私の庭だもの。姉さんと私のね。

良夫 ……「みなさんがウエンディーを見つめているうちに、ウエンディーの髪は

白 なくなつてゆき、姿はだんだん小さくなつてゆくのに、気が付くでしょう。無理もあ

り ません。この出来事はもうずっと昔に起こったことなのですから。」

光子 なあに？

良夫 別に…

と、ボロボロの黒いスーツを着て雨に濡れた男が立っていた。

良夫 何ですか？

男 七海を知りませんか？

良夫 え？

男 七海……

良夫 ……

男 一海という名かもしれませんが。

良夫 さあ……

男 娘なんです。この庭で道に迷ってしまったみたいで……

光子 ここには誰も来ないはず。誰も知らない庭だから。

男 そうですか……でも郵便屋さん、さっきこれを落としましたよ。

と、懐中より雨でにじんだ手紙を出す。

良夫 それはどうも。

男 その宛て名、こちらの住所ですよ。

良夫 ああ、そうだ。

男 七海と書いてあるでしょう？井森七海と……

良夫
僕が

さっきの雨でにじんだようで、すみませんが僕にはちよつと……あれ？これ

落としたんじゃないなあ……消印押してないから。お姉ちゃん、これ、誰かが直

接

うちのポストに入れようとしたんだよ。ありがとうございませう。きつとお姉ちゃん

に

だよ。

光子受け取る

男
光子

しばらくここに座っていてもいいですか？

ええ。

と、直子が出てくる。妊娠しているらしくお腹がずいぶんどでかい。

良夫

なんだよ。

直子

あら、あんた来てたの？

良夫

休んでろよ。

直子

ちよつとおすそわけ。それからこれとこれ。五個入り六個入りで買った方が安いか

ら、

パ

つついっばい買ったんだけど、うちもこんなにいらなから。(とスー

ーの袋から色んなものを出して別の袋に分ける)

良夫 だったら一つずつ買った方が金額がかさまなくて済むじゃないか。

直子 細かいこと言わないの。いいじゃないの、お義姉さんここにあげるんだから。

良夫 そういうことじゃないんだよ。．．．いいよもう、早く帰れ。

直子 この庭、前より大きくなつたみたい．．．

男 ．．．まるで原始の森だ．．．

直子 あ、こんにちは。

男 ．．．．．

直子 ．．．．．

て

直子、良夫と光子を見るが、光子、庭の手入れをしている。良夫はそれをじっと見

いる。

田中かず夫とまさ子よそ行きで通りかかる。

まさ子

あら、直子ちゃん

直子 おばさん、こんにちは。どうしたの？

かず夫 安くて日当たりのいいところ見つかったんで。

まさ子 ちょっと下見に行くんですよ。

直子 ええ？引っ越しちゃうの？

かず夫 はあ、職場も変わるんで……

まさ子 皆さん、お世話になりました。また改めて挨拶に伺います。

光子さん、時々庭を見に来るわよ。

光子 ええ。

かず夫 なんだよ、下見に行くだけだぞ。じゃ行ってきます。

と、田中達が去る。

直子 私達も行こう。あんた後ろ乗せてって。

良夫 バカ、危ないよ。

直子 危なくなったら降りるから。

と、直子無理やり自転車の後ろに乗る。

良夫 姉ちゃん、また来るよ。

光子は庭の手入れを続けている。

じっと座っている男。

後方では水の人達が細い糸を作っている。

水をまく光子、その手のじょうろに手をかけた少女がいる。少女、光子の体をすりぬける。

庭のあちこちに、水をまいている七人の同じ姿の少女が現れる。

光子ゆっくりと目を閉じ、眠るように庭に水をまいている。

引用文献『ピーター・パン』（著／J・M・バリ 訳／厨川圭子）